

107

早稻田大學三十九年度  
第一學年講義錄

東西交通史

村上直次郎

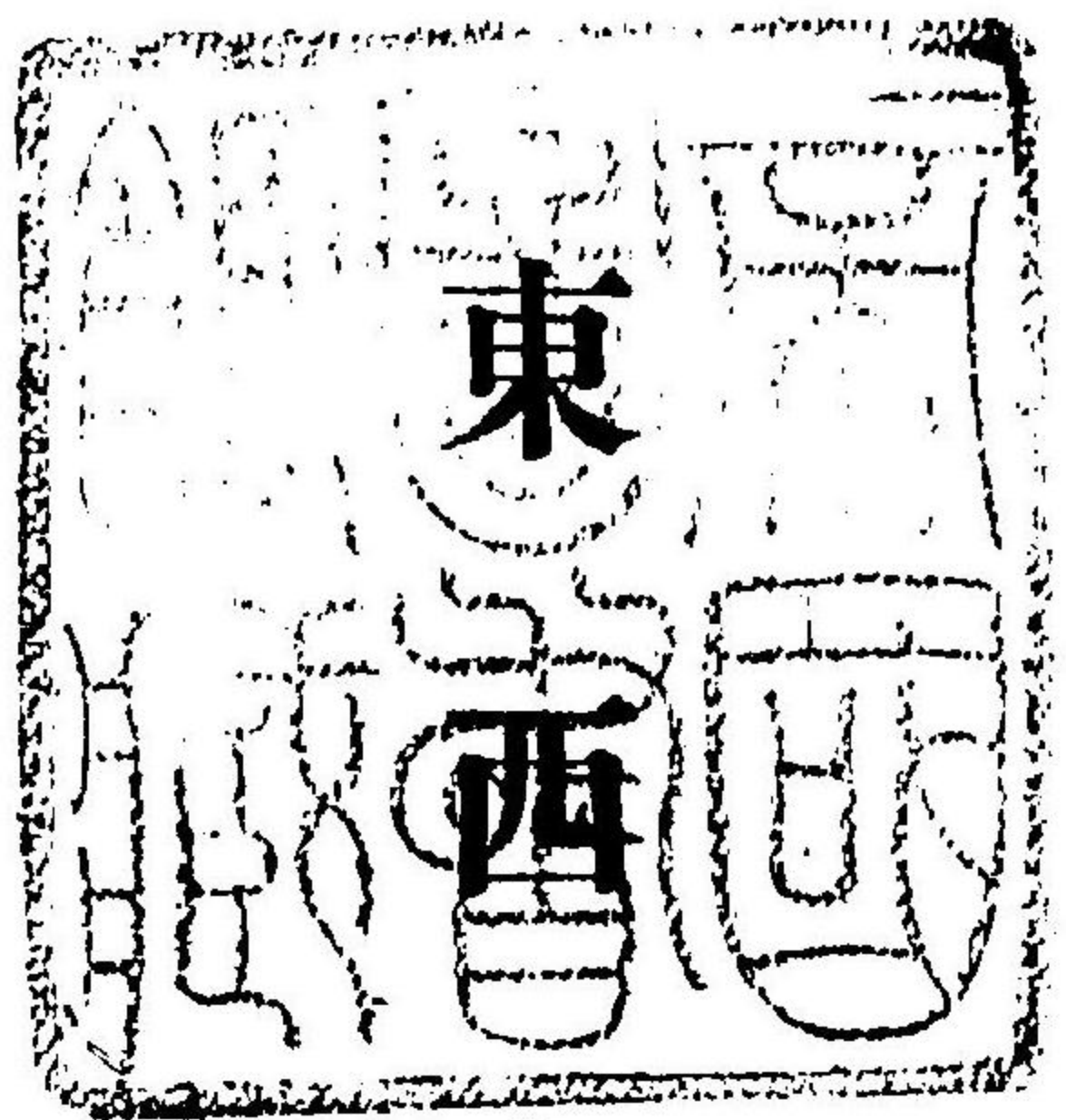
310530-000-0

6.2-401

東西交通史

村上直次郎 講述

文學士村上直次郎講述



交通史

早稻田大學出版部藏版

目次

緒言……………頁

第一章 中世期に於ける支那と西洋との交通……………三

第二章 新地発見の時代……………二六

第三章 ポルトガル人の極東來航……………六一

第四章 日本に於ける基督教の宣教……………七八

目次終

目次

# 東西交通史

村上直次郎 述

## 緒言

東洋と西洋との交通は太古に始り時と共に益々頻繁になつて文化の上にも相互に影響したとは殆んど豫想外に多いのであるが此講義では日本を主とし極東の諸邦と西洋諸國との交通を説き彼我文明の關係を論ずる積り年代も重に近世に係るのである。

交通事蹟は未だ世の中に廣く知られて居ないので本論の間に彼我の重要な文書や舊記等の全文又は抜書載せて説の根據を示す考である此は一見甚だ煩雜であるが又大に興味を添へ研究獎勵の一端ともなるであらうと思ふのである。

外國の地名人名は既に一般に用ひられて居るものは其儘とし他は成るべく歐洲諸國の稱へ方の内日本人の發音に適するものを探り便宜の爲め何れも英語の稱へ方

を書き添へる筈である。

## 第一章 中世期に於ける支那と西洋との交通

西洋で支那を知つたのは確に何時頃からであるかと云ふとは明らかでないが基督紀元百五十年頃の著であるトレミー (Ptolemy) の地理志にシネー (Sinae) セリス (Seri) 及び其國都セラ (Seris) と云ふ名が見えて居て支那地方を指して居る様である。支那でも後漢の頃から大秦又は拂菻と云ふ名で西洋地方の事を知り記録にも載せてあるが双方正確な智識を得る様になつたのは唐の代に景教の徒が支那に基督教を傳へた時からである。

抑も景教の徒と云ふはネストリウス (Nestorius) の門徒で同人はもとコンスタンチノープル (Constantinople) の管長であつたが基督の神人兩性に關して稱へた説が異端と斷ぜられ四百三十一年職を革められてアンチオキヤ (Antioch) に退き後又アラビヤ (Arabia) に移つたのである。然るに其門徒は漸くシリヤ (Syria) アラビヤ邊に殖え唐の太宗の貞觀九年には支那に入り皇帝の許を得て基督教を傳ふるに至つた。爾後盛衰はあつたが先づ歴代の皇帝の庇護を得て寺院の數も教徒の數も増加した武宗の代に佛寺を破壊し僧尼を還俗させたと同時に外教を抑壓したので基督教の勢力も漸

く衰へ其後百年許の間に殆んど全滅に至つた併し此の前後三百年の間には東西の交通は頗る頻繁て事情も通ずる様になつたのであらうと思はれる。

ネストリウスの徒が支那に傳道したとは唐の建中二年に建てた紀念碑に明記してあるその碑は永く新安府即ち昔の長安の都の近郊に埋つて居たのを偶然千六百二十五年に發掘した碑は高さ六呎四分一幅三呎あつて中央上部に十字を刻し大秦景教流行中國碑と題し其下に漢文あり末に僧徒の名をシリヤ文字及び漢字にて認め碑の下方にはシリヤ文字數行の説明書がある此は景教の碑 (Nestorian Monument) と云ふて有名なものでキルハム (Athanasius Kircherus, China Monumentis qua Sacris qua Profanis, Amsterdam, 1667) ハン (J. Legge, The Nestorian monument of Hsi-an fu, Shenhai, China, relating to the diffusion of Christianity in China in the 7th and 8th centuries, London, 1888) 等が評註を加へて世に公にしたものがあるし天道溯源にも載せてある又東京文科大學の市村教授は先年同碑文の石刷を持ち歸られたと云ふとてある今左に全文を載せて讀者の研究に資せう。

景教流行中國碑頌并序

大秦寺僧景淨述

粵若常然真寂先先而无元皆然靈虛後後而妙有總立樞而造化妙衆聖以元尊者其

唯 我三一妙身无元真主阿羅訶歎判十字以定四方鼓元風而生二氣暗空易而天地開日月運而晝夜作匠成万物然立初人別賜良和令鎮化海渾元之性虛而不盈素蕩之心本無希嗜泊乎娑羅施妄鈿飾純精間平大於此是之中隱冥同於彼非之內是以三百六十五種肩隨結轍覓織法羅或指物以託宗或空有以淪二或騰祀以邀福或伐善以驕人智慮營營思情役役茫然無得煎迫轉燒積昧亡途久迷休復於是 我三一分身景尊彌施訶戢隱真成同人出代神天宣慶室女誕聖於大秦景宿告祥波斯親耀以來貢圓廿四聖有說之舊法理家國於大猷設 三一淨風無言之新教陶良用於正信制入境之度鍊座成真啓三常之門開生滅死懸景日以破暗府魔妄於是乎悉摧棹茲航以登明宮含靈於是乎既濟能事斯畢亭午昇真經留二十七部張元化以發靈開法浴水風滌浮華而潔虛白印持十字融四照以合無拘擊木震仁惠之音東禮趣生榮之路存靈所以有外行削頂所以無內情不畜威渡均貴賤於人不聚貨財亦罄遺於我齋以伏識而成戒以靜慎爲固七時禮讚大庇存亡七日一薦洗心反素異常之道妙而難名功用昭彰強稱景教惟道非聖不弘聖非道不大道聖符契天下文明 太宗文皇帝光華啓運明聖臨人大秦國有上德曰阿羅本占青雲而載真經望風律以馳艱險貞觀九祀至於長安帝使宰臣房公玄齡惣仗西郊賓迎入內翻經書殿問道禁闕深知

正真特令傳授、貞觀十有二年、秋七月、詔曰、道無常名、聖無常體、隨方設教、密濟群生、大秦國大德阿羅本、遠將經像來獻上京、詳其教旨、玄妙無爲、觀其元宗、生成立要、詞無繁說、理有忘筌、濟物利人、宜行天下、所司即於京畿寧坊造大秦寺一所、度僧廿一人、宗周德爽、青鸞、西昇、巨唐、道光、景風、東扇、旋令有司、將帝寫真、轉撲寺壁、天裝汎彩、英朗景門、聖迹騰祥、永輝法界、案西域圖記、及漢魏史策、大秦國南統珊瑚之海、北極衆寶之山、西望仙境花林、東接長風弱水、其土出火浣布、返魂香、明月珠、夜光璧、俗無寇盜、人有樂康、法非景不行、主非德不立、土宇廣闊、文物昌明、高宗大帝、克恭繼祖、潤色真宗、而於諸州各置景寺、仍崇阿羅本爲鎮國大法主、流十道、國富元休、寺滿百城、家殷景福、聖曆年、釋子用壯、騰口於東周、先天末、下士大笑、訕謗於西鑄、有若僧首羅舍、大德及烈、並金方貴緒、物外高僧、共振玄綱、俱維絕紐、玄宗至道皇帝、令寧國等五王、親臨福宇、建立壇場、法棟暫撓、而更崇道石、時傾而復正、天寶初、令大將軍高力士、送五聖寫真、寺內安置、賜絹百疋、奉慶容圖、龍髯、雖遠、弓劍可攀、日角、舒光、天顏咫尺、三載、大秦國有僧倍和、瞻星向化、望日朝尊、詔僧羅舍、僧普論等一七人、與大德倍和、於興慶宮修功德、於是天題寺、勝額、載寶書、寶裝璫翠、灼燦丹霞、睿札宏空、騰凌激日、龍寶比南山、峻極、沛澤與東海、齊深、道無不可、所可名、聖無不作、所作可述、肅宗文明皇帝、於靈武等五郡、重立景寺、元

善資而福祚開、大慶臨而皇業建、代宗文武皇帝、恢張聖運、從事無爲、每於降誕辰、錫天香以告成功、願御饌以光景衆、目乾以美利、故能廣生、聖以體元、故能享壽、我建中、聖神文武皇帝、披八政、黜陟幽明、闡九疇、以維新景命、化通玄理、祝無愧心、至於方大而虛、專靜而恕、廣慈救衆、苦善貸被群生者、我修行之大猷、汲引之階、漸也、若使風雨時天下靜、人能理、物能清、存能昌、及能樂、會生響應、情發自誠者、我景力能事之功用也、大施主金紫光祿大夫、同朔方節度副使、試殿中監、賜紫袈裟僧伊斯、和而好惠、開道勤行、遠自王舍之城、聿來中夏、術高三代、藝傳十全、始効節於丹廷、乃策名於王帳、中書令汾陽郡王、郭公子儀、初愆戎於朔方也、肅宗俾之從邁、雖見親於臥內、不自異於行間、爲公爪牙、作軍耳目、能散祿賜、不積於家、獻臨恩之頰、黎布辭憩之金、闕或仍其舊寺、或重廣法堂、崇飾廊宇、如羣斯飛、更効景門、依仁施利、每歲集四寺僧徒、虔事精供、備諸五旬、饒者來而飯之、寒者來而衣之、病者療而起之、死者葬而安之、清節遠、裝未聞斯美、白衣景士、今見其人、願刻洪碑、以揚休烈、詞曰、真主无元、湛寂常然、權興匠化、起地立天、分身出代、救度無邊、日昇暗滅、咸證真元、赫赫文皇、道冠前王、乘時撥亂、乾廓坤張、明々景教、言歸我唐、翻經建寺、存歿舟航、百福偕作、万邦之康、高宗繼祖、更築精宇、和宮敞朗、遍滿中土、眞道宣明、式封法主、人有樂康、物無災苦、玄宗啓聖、克修真正、御勝揚輝、天





僧大和  
僧崇徳

碑文の下方にあるシリヤ文字の説明書と並んで左の文字がある

僧 鑑 寶

檢校建立碑

僧 行 通

助檢校試太常

卿賜紫袈裟寺

主 僧 業 利

右の文中にある阿羅阿はアラ(Allah)即ち神、彌施訶はメシヤ(Messiah)即ち基督で、娑摩はサタン(Satan)悪魔の音を表はしたのである。其他人名地名等には不明で考證を要するものが多い。大秦といふは何國の事であるかに付ても、古來議論が多い。はじめは

一概に基督教の大本山であるローマ(Rome)であらうと考へる人が多かつた。クラプロート(Klaproth)ドギーンニ(P. J. de Guignes)ブレットシナイデン(Dr. E. Bretschneider)ドトホーンマン(von Richtofen)等歐洲知名の支那學者は皆此説であつた。所がヒルト氏(F. Hirth)が其著(China and the Roman Orient, 1885)に於て大秦はシリヤ(Syria)であるとす。新説を出してからは世人は大部其説に傾いた。ポーチエー(G. Pauthier)も De l'Authenticité de l'Inscription nestorienne de Singan-fu, Paris 1857 及び L'Inscription Syro-chinoise de Singan-fu, Paris 1858 等に此碑文の事を論じシリヤ説に賛成して居る。又此頃に至つて白鳥教授は大秦はエジプト(Egypt)で其都はアレキサンドリヤ(Alexandria)であるといふ意見を公にせられた。史學雜誌第十五編第四、五、八、十、十一號參照。其當否は諸君の研究せらるべき事であるが、景教流行の頃支那と西洋との交通があつた事は明かである。

西洋に於て善く支那を知る様になつたのは蒙古人が支那を併するに至つてからである。蒙古人はテムシン(鐵木真 Temuchin)の代になつて勢力盛になり、基督紀元千二百十一年北方から支那に侵入し、千二百十五年には遂に北京を占領した。其后テムシンは兵力を西方に轉じ、北は裏海(Caspian Sea)南はインダス河(Indus)を境とせる地域を征

服し、其部下の一隊は進んでロシア(Russia)アルメニア(Armenia)ジョルジア(Georgia)に攻め入つた。千二百二十七年ラムシン死し其子オコダイ(窩淵臺 Okodai)が其跡を繼いでから、千二百三十四年支那北部の占領を確實にし、更に西方に轉じ一軍はアルメニヤ、ジョルジア、小アジアに向ひ一軍はバツ(拔都 Batu)之を率ゐてコーカサス(Caucasus)以北の地を征服し又ろしやを従へ、自ら進んでハンガリー(Hungary)を攻めヘスト(Pesh)を陥れ市民を屠り其家を焼いた。一枝隊はポーランド(Poland)に入り都クラカウ(Crakov)を焼き、千二百四十一年四月十二日リグニツ(Ligitz)附近に於て大に歐洲の連合軍を敗つた。歐洲諸國は此報に接して戦慄し歐洲の全土を擧げて蒙古軍の占領に歸するかと思はれたが、此時にオコダイの死報が達して侵入軍は遂に引上げ歐洲人は始めて安堵の思をなした。

千二百五十五年蒙古軍は又裏海の南とバグダッド(Bagdad)シリヤ方面へ向つた。此頃が蒙古人の勢力が頂上に達した時で、千二百五十九年マングーカン(蒙哥 Mangku Khan)死して大カンの帝國は四分し蒙古、滿洲、支那、朝鮮、西藏のみが大カン直轄の國となり、グブライカン(忽必烈 Kublai Khan)之を治めた。

蒙古の盛時に歐洲からカンの所に數次使節を派した。當時カンの部下には基督教を

奉じて居たもの尠からず、又基督教徒に對するカンの態度が寛容であつたので、カン自らも基督教を奉じて居るといひ、或は奉ずるの意があるといふ噂が傳つた。そこで法王インノセント(Pope Innocent)は千二百四十五年サンフランシスコ派のビヤノ、カルビニ(John of Piano Carlini)に命を傳へて蒙古の朝廷へ使をさせた。ビヤノ、カルビニは同年四月フランシスコのリヨン(Lyons)を發し、ドイツ、ロシア諸國を経て千二百四十六年ボルガ河畔(Volga)の蒙古軍の本營に着き、バツに面會し其所から送られて七月二十二日カラコールム(Karakorum)附近の大カンの本營に到着した。クナクカン(貴由 Kuyuk Khan)は法王遣使の主旨を聽き十一月中旬之に對し驕慢なる挨拶をして使者を還した。ビヤノ、カルビニは千二百四十七年の秋歸着して法王に復命した。彼の報告によつて支那のことが一層明になつた。此頃支那はキタイ(Kitai, Cathay)と稱へられて居た。これは滿洲の一種族で一時支那を治めた遼朝も此種族であつた。

次に蒙古に使したのは、フランデス(Flanders)の人で同じサンフランシスコ派のルブルク(Rubruk, William of Rubruk Rubruguis)であつた。セントルイス王(Saint Louis)の命を帯びてフランスを發し、千二百五十二年五月黒海に達し、バツの營を経てカラコールムのマングーカンの朝に到り、千二百五十五年六月末アンチオキヤ(Antioch)に歸着した。彼

の報告にキタイはカラコールムの東南二十日程の地で最良の絹を産し、其土人は各種の工藝に巧みて、醫術も亦進歩して居ることや、通貨言語發音文字等のごがいろく載せてあつて頗る精密なものである。

右の二人よりも更に明に支那を紹介したのはマルコポーロ (Marco Polo) であつた。ポーロの家はイタリア國ベニス (Venice) の名家であつたが千二百六十年ニコロ・ポーロ (Nicolo Polo) とマツフネオ・ポーロ (Marco Polo) の兄弟がコンスタンチノープル (Constantinople) から商業の爲めにクリミア (Crimea) に行き、其所からボルガ河に沿うて北方に進み、終にボクハラ (Bokhara) を経てクブライカンの朝廷の在る所に着した。カンは始めて歐洲人を見ボロ兄弟の言を聞いて宮廷の一吏を附け、兩人に書を與へて法王の所に行き宣教師を派遣することを求めさせた。兩人がエクル (Acre) に着いたのは千二百六十九年の四月であつたが此時前法王死し其後任者選舉中であつたので先づベニスに還つた待つこと二年に及んだが法王の選舉が済まなかつたので兩人は法王の返答を待たず當時十五才であつたニコロの子マルコを伴うて出發しエクルを経てアヤス (Ayas) の港まで行つたが此所で法王グレゴリー十世 (Gregory X) 就任の報に接し引き返して使命を果し、千二百七十一年十一月頃再びエクルを發した。法王がク

ブライカンの求に應じて派遣したのは僅に二人のサン・ドメニコ派 (Dominicans) の宣教師であつたがこれさへ中途から引き返した。ポーロ等はエクルからアヤスに渡り、エーフラタス河 (Euphrates) ナゾリス河 (Tigris) 間の地を過ぎてバグダット (Baghdad) に出てペルシヤ灣 (Persian Gulf) を渡つてオルムス (Ormus) に行き、此所から東北に進んでパン (Pamir) の高原に出で、カシユガル (Caspian) ヤルカンド (Yarkand) コータン (Khotan) ロン湖 (Lake Iob) を過ぎ、ゴビの砂漠を越えて支那の境に入り、千二百七十五年五月頃カンの居城開平府に着いた。此旅行には實に三年半を費したのであつた。

一行はクブライカんに復命して其儘に支那に留つた。カンは彼等を優待し特にマルコを愛して後には之を官吏に任用し漸次に重く用ひた。マルコは命を帯びて屢々帝國内を巡視し南は遠く雲南占城から、西は西藏の境、北はカラコールムの舊都まで廻歴し到る處でカんに報告すべき珍奇なる事柄を集めた。これが後に其書に載せて歐洲人に傳へられたのである。

千二百八十六年ペルシヤ王アルゲンカン (Arghun) の妃が死んだので王はクブライカンの處に使を遣し新妃となるべき人を求めた。クブライカンはコカチン (Kokachin) を撰定した。

ボロ等は多年支那に滞在したので歸思が盛んであつたけれどもカンの許を得なかつた然るに新妃を海路ヘルンシャに送ることゝなつてからヘルンシャの使者等はボロ等が航海の経験あるのを聞いて同伴を希望しカンの許可を得た一行は千二百九十二年の始め所謂ザイトン(Zaiton)即ち泉州を發しスマトラ(Sumatra)南インド(India)等で風待の爲めに永く逗留し使者三名中二人を始め一行中多數を途中で失つて二年餘の後ヘルンシャに到着した此時アルグン、カンは既に死んで居たのでココチンはその子ガザン(Ghazan)に嫁することゝなつた。

ボロ等は此長途の航海中も無事で幾多の新智識を得暫くヘルンシャの都に逗留した後ベニスに歸つたがその故郷に到着したのは千二百九十五年のことであつた其頃イタリヤの諸市中ベニスとゼノア(Genoa)とは最も繁昌したもので何れも盛に東方の貿易に従事し互に海上の權力を争ひ屢々衝突したことがあつた千二百九十四年にも兩市の船艦がアヤスの沖で戦ひゼノア艦隊が大勝利を得たベニステは此報を得て大に激昂し大準備を整へて報復せうと計つたゼノアの方では又一擧してベニスを亡す覺悟で双方の大艦隊が千二百九十八年九月七日アドリヤ海(Adriatic Sea)のクルツラ島(Curzola)附近で戦ひゼノア方終に大勝利を得敵の七千餘人を捕虜

としたマルコポロは一艦の指揮に當つて居たが此捕虜の一人となつたのである。マルコポロは他の捕虜と共にゼノアに拘禁されて居たが千二百九十九年五月ゼノアとベニスとの間に平和條約が締結調印され兩市の捕虜は解放されることゝなつたマルコポロは同年八月末にベニスに送還されたやうである其後彼はベニスに定住し千三百二十四年に死んだ。

マルコポロがゼノアに拘禁されて居た間に同じく禁錮されて居たピザ(Pisa)の人類スチチャノ(Eusticiano)に口授して一書を著したこれが有名なマルコポロの旅行記で原文はフランス語であつたが間もなくイタリヤ語に譯され次いでラテン語及び歐洲諸國の語に譯された今日現存して居るものゝ内

- ラテン語寫本 四十一種
- フランス語寫本 十種
- イタリヤ語寫本 二十一種
- ドイツ語寫本 四種
- アイルランド語寫本 一種

印刷したものは千四百七十七年のドイツ版を第一としラテン、イタリヤ、ポルトガル

イスパニヤ、フランス、イギリス、オランダ語譯の版本が続々出て、十九世紀の後半の間にポーチエル (Pauthier) ユール (Colonel Henry Yule) 等の註釋を加へた書が出来、此頃は又フランスの支那學者、コルヂエー (Henri Cordier) が新註を加へたものが公にせられた。マルコ・ポロの旅行記 (The Book of Ser Marco Polo, the Venetian concerning the Kingdoms of the East) は緒論及び本文の二部に分れ、第一部はポロ等の支那に到れる始末を叙し、第二部はマルコ・ポロが通過せる各地の事情を記せるものであつて、はじめ部の區分はなかつたが便宜の爲めに通常本文を三篇に分ちあり、第一篇にはカンの朝に至る途中の事、第二篇には帝國內各地の事、第三篇には日本及び近海の各地の事を叙し、第四篇は蒙古の諸王の戦鬪の事を載せてある。マルコ・ポロは自己の見聞を基として此書を著したので、支那各市のこと及びクブライカンのことは勿論極東の事情は委敷此書によつて知ることが出来る。日本の事は第三篇第二章に載せてある。

ジバング (Zibangu, Chibangu 日本國) は東方の大海にあり、大陸を去ること千五百哩にして甚だ大なる島なり。

島民は色白く開明にして容貌佳なり、彼等は偶像を拜み全く獨立なり、其國には多く黄金を産し、國王は輸出を許さず、其國は大陸より遠くして商買の來往するもの

も尠きが故に國內の黄金の量は甚だ多大なり。

國主の宮殿の屋根は黄金を以て葺くこと、恰も歐洲の寺院の屋根を鉛にて葺けるが如し、宮殿の敷石及び各室の床は二指の厚さなる黄金の板を以て作り、窓も亦黄金製なり、故に此宮殿の華美なることは殆んど信すべからざる程なり。

眞珠も亦多く産す、其色は蔷薇色なれども圓くして大なれば價値は白色のものに劣らず、死者を火葬するときには其口に右の如き眞珠一箇を含ましむるの習慣なり、此地又他の寶石を産す。

右の記事の次にクブライカンが日本を征服せんと欲し大軍を出したが暴風の爲めに殆んど全滅した事の顛末が載せてある。

マルコ・ポロのジバングの記事は歐洲に我邦の事を傳へた最初のもので、コロンブスがアメリカを發見したのも實はジバングに來る新路を求めんとしてあつたことは後に委敷説く積である。

ポロ等と同時代に歐洲から支那に往つたものは尠からずあつたやうで、マルコ・ポロの紀行中にも其指揮の下に忽必烈汗の攻城に與つたドイツ技師のことが記してある、又支那から西方に出た星學者、醫師、技師等も多かつたやうであるが惜しいこと

には記録に委しいことが傳つて居なす。

マルコボロ等が故郷に歸り著いた頃から新に支那に入り込んだ歐洲人がある、此は宣教師輩で最初に往つたのはイタリヤの人でサン・フランシスコ派のモンテ・コルビノのジョン (John of Monte Corvino) である、此人は永くベルシヤ地方の布教に従事して居たが千二百九十一年ベルシヤのタブリス (Tabriz) を發し海路インドに行き、サントメ (St. Thomas) 其他コロマンデル (Coromandel) 海岸の諸市を歴遊して千二百九十四年頃北京 (Cambalec) 即ち汗の都と稱せりに着いた、其後同所に於て基督教の宣布に従事して居たが千三百七年其報告書が法王の所に届けられたので法王は彼を北京の大司教 (Archbishop) に任じ之を助くる爲めに七人の同派の宣教師を派出した、此内悉なく支那に到着したのは僅に三人でその名はゼラルド (Gerard) カステルロのベングリネ (Peregrine of Castello) ヘルヂヤのアンドレー (Andrew of Perugia) とすつた、千三百十二年に法王は又トーマス (Thomas) ゼローム (Jerome) フロレンスのペテロ (Peter of Florence) の三人を派遣した。

モンテ・コルビノのジョンは此等の補助員を得た前最初は誰一人であつたがコローン (Cologne) の人、フライアルノルド (Friar Arnold) が後に加はつた、ジョンは千三百年

頃北京に會堂を建築し、次いで千三百五年皇帝の宮城前に新會堂を建て洗禮を授けたものは前後六千人に越え、又百五十人の少年を教育し之にラテン、ギリシヤの語を教へ、其中より選抜して合唱隊を作り會堂に於て讚美歌を歌はせた、又詩篇、祈禱文等を翻譯した、彼は千三百二十八年八十餘歳の高齡に達して死し、教徒以外の人よりも大に惜まれたといふことである、其書簡の今日まで存して居るものによつて彼の事業は勿論當時の支那インドの事を如何に歐洲に紹介したかよく判る。

法王が送つた第一回の補助員は千三百八年北京に着しゼラルド先づザイトン即ち泉州の教會の司教 (Bishop) となつた、その死後ベングリネが之に代り千三百二十二年ベングリネも亦死んだのでアンドレーが後任者となつた、其頃泉州の城外にも亦アンドレーが建てた會堂が一つあつた、法王が送つた第二回の宣教師中のフロレンスのペテロは後に此會堂の司教となつたといふことである。

大司教ジョン死去の報が到着したので法王は千三百三十三年にフライ・ニコラス (Fray Nicholas) を後任とし僧俗二十六人を隨員として派遣したといふことであるが北京に到着したか如何か知れない、又其後カンパルクの大司教に任ぜられたものが數名あるが果して任に就いたか或は只名のみを貰つたのか判然しない。

千三百二十二年には又イタリアのポルデノーネ (Pordenone) の人と同じくサン・フランシスコ派のオドリック (Odoric) が支那に入つた彼はサン・フランシスコ派に加つた後修業の爲め早くから所々を巡歴し聖人の名が高かつたが千三百二十年頃コンスタンチノープルから小アジアに渡りベルシヤに入りバグダッドを通過してベルシヤ灣に出てオルムズを経てスラット (Surat) に渡りインドの西海岸を下りシーロン (Ceylon) スマトラ (Sumatra) シヤバ (Java) ボルネオ (Borneo) チャンパ (Champa 占城) 等を経て廣東に來り福建南京等を歴遊して北京に着き同所の基督教會堂の一を預かつた此はモンテコルビノのジョンの存生中であつた三年間此所に滞在して後オドリックは西藏を徑てイタリアに歸へつた此長途の旅行中常に同伴したのはアイルランド (Ireland) の人セームス (Frier James) であつたオドリックは千三百三十年パドワ (Padua) 滞在中に其旅中に見聞した事を話し同派の人が之をラテン文に綴つたオドリックはその翌年の始めに死んだが其書は今日に傳はりイタリア、フランス等の譯文あり英譯文はコロネル・ユールのカセー (Colonel Henry Yule, Cathay and the way thither) に載せてある。

千三百八年に支那の大カンからアンドレー等を使者としてフランスのアビニオン (Avignon) に居た法王の所へ遣し相互の交通を繁くすることとフライジョンの後繼者となるべき人の派遣を求めた法王は此使者を歓迎し答書を與へて之を還し同年の十月にイタリアの人マリニョリのジョン (John of Marignoli) 等を派遣することとした一行は同年十二月にアビニオンを發しイタリアのネーブル (Naples) へ先發してイタリア地方を歴遊して居た支那の使者と會しコンスタンチノープルを經黒海を渡りキプチャク (Kipchak) チャガタイ (Chagatai) 等のカンの領内を過ぎて千三百四十二年五六月頃に北京に着いた此所に三年許滞留した後ザイトンから乗船し千三百四十六年又は四十七年十二月二十六日インドに立寄りオルムズから陸行してパレスティン (Palestine) に出でイタリアに渡り千三百五十三年にアビニオンに到着したその翌年頃オーストリア皇帝チャールス四世 (Charles IV) の知遇を得伴はれてプラグ (Prague) に至り終にボヘミア年代記の編纂を托された此書中にその旅行中の見聞を書き入れたが意外なことで誰れも知らなかつたのを千八百二十年に至つてマイネルト氏 (J. G. Meiner) が之に氣付きマリニョリの旅行に關する分文を抜萃しドイツ語に譯し評註を加へて世に公にしたこれにカンバレク到着の節大カンが法王の贈つた馬を見その書を得て喜んだことなど載せてある。

此頃インドや支那に歐洲商人の入り込んだものゝあつたことは前記の紀行中にも散見して居る、モンテコルピノのジョンど同伴して支那に入つたルコロンゴのペテロ (Peter of Lucolongo) といふ商人の事、ザイトンの司教アンドンと同時に同所に居たゼノア商人の事、マリニヨリ時代にザイトンの教會堂に附屬して基督教徒なる商人の爲めに建てた商館及び倉庫があつた事等がその例である、又十四世紀の始めにフロレンスの豪商バルヂ家 (Bardi) の使備人でロンドン、アンヘルス (Antwerp) クプロ (Cyprus) 等に出張して取引に従事したベゴロッチ (Francesco Balducci Pegolotti) の書いたものに支那に行く道程の事や商品の種類、價格等の事があるのを見ても、當時支那貿易が盛であつたことが判る。

ベゴロッチの書中支那に付て次のごとき事が載せてある。  
カセーには都會が澤山あるがその中に主要なもので商人の集り商業の盛なのはカンパレクカンパレクの市である、この市は周圍が一百哩あつて家の數も人口も甚多い、ゼノア又はベニスからカセーに行く人はリンネル (linens) を持つて行き途中オルガンチ (Organel, Urgan) で之を銀に換へるがよい、カセーに到着すると國主は銀を取り上げて代りに黄紙に國王の印を押した紙幣を與へる、此で生糸其他好きな商品

を買ふ事が出来る、國人は紙幣を受取らなければならぬことになつて居てその價は銀貨と異なる處はない、紙幣には價の違つたものが三種ある。

カセーの生糸の代價は十九斤又は二十斤で銀一ソンモ (sommo) で、ソンモは重量ゼノアの八オンス半で混合率は一ポンドに銀十一オンス十七ヘニ、ウエイトその價格は金貨五フロリンに相當である、カセーでは又紋織絹三反又は三反半を一ソンモで買ふ事が出来る、金入絹織物三反半乃至五反の價も全じく一ソンモである、カセーに旅行するには金貨二万五千フロリンの貨物を携へ通譯一人と僕二人とを伴うてその費用は六十乃至八十ソンモで充分である、カセーから歸途黒海濱のタナ (Tana) までには要する費用も荷物を附けた牛馬一頭に就いて五ソンモ以内である、この内には下人の食費給金その他一切の費用がはいつて居る、牛車は各一頭の牛に引かせ二千五百斤まで載せることが出来、馬車は馬一頭で千六百斤位駱駝車は三頭の駱駝に引かせて七千五百斤迄積載する、生糸一包の重量は百十斤乃至百十五斤である。

タナからカセーに行く道路は旅行した商人の言によれば晝夜共に安全である、只商人が途中で死ぬ時にはその財産は其國の主のものとなる尤もその兄弟か又は



親友で兄弟と稱する者がある時には死者の財産は彼に渡される、これはカセーでも全様である、もう一つの困難は國主が死んで次の國主が任に就く前に土人が佛郎機(Franks)その他の外國人に對して不法な行爲をすることがある、新國主の即位する迄は旅行も安全でなす。

此書も前に擧げた諸記録手簡等も皆ユールのカセーに英譯して載せてある。第十四世紀の中頃から支那と歐洲との行通が絶え宣教師のアビニョンから支那に派遣せられたことはあつても、其消息が絶えてなかつた、これは蒙古の朝が倒れて支那政府が外國人を排斥する政策を取つた爲めてカセーの名は此後も詩文小説に見え地圖にも載せてあり千四百四十年頃ニコロコンチ(Nicolo. Conti.)の談話と云つて支那のことを説いたものが世に公にせられたこともあるが、支那は次第に歐洲人に忘れられ近世に至つてポルトガル人が支那に來た頃には往時に歐洲と支那との間に交通のあつたことは殆ど忘却せられて居たのである。

## 第二章 新地發見の時代

往古西洋で最も珍重した東洋の貨物は前章にも述べたやうに生糸及び絹織物であ

のが又綿綿布、麻布、製革、寶石、金銀細工、薫物、香料等も多く輸入された、中にも薫物は祭式に用ひ又今日の香水、香油などの代用をなし、香料(spices)は飲食物に加味するのて需用が甚だ多かつた。

十字軍時代に兵員軍需品輸送の任に當つたのは主としてイタリアの諸市であつて、皆その爲めに大に利益を收めたが、殊にベニスは海運の業大に發達し、黒海艦隊、アルメニヤ(Armenia)艦隊、エジプト(Egypt)艦隊等を編成してその商船を保護し、専ら東邦貿易に従事するに至つた、其頃インド地方通商の路は三條あつた。

第一地中海岸よりオロンテス河(Orontes)を溯りてアンチオキヤ(Antioch)に至り、エーブラテス(Euphrates)チグリス(Egris)兩河間の地を南下してバグダッド(Bagdad)に出てチグリス河を下りてペルシヤ灣頭のバストラに至り、海路インドに至るもの。

第二 黒海東南岸の港トレビゼンド(Trebizond)より小アジア、アルメニヤの高原を経て兩河間の地に出てバグダッドより前路に由りてインドに至るもの。

第三 アレキサンドリヤ(Alexandria)より二百哩の運河によりてカイロ(Cairo)に至り、ナイル河(Nile)を溯り砂漠を越えてアデン(Aden)に出て海を渡りてインドに至るもの。第十四世紀の後半に小アジアに興つたトルコ人(Turks)が東歐に侵入し、トルコ(Turkey)

のハドリアノープル(Hadrianople)を都として尋てセルビア(Serbia)ブルガリア(Bulgaria)を占領し千四百五十三年には東ローマ帝國の首府コンスタンチノープルを攻め取り千五百十二年から同二十年に亘つてセリム一世がエジプトを征服したので東邦貿易の通路は三條とも全く断たるゝに立ち至つた。こそでこれまでベニスを経て歐洲諸國に輸入され來つた東洋貨物の供給が絶え更に新しい路を求めてその缺を補はなければならぬことゝなつた。

その頃歐洲では東方に基督教國に君臨し自ら祭司を兼ねたプレスナルジョン(Peter John)といふ威權赫々たる王があるといふ噂があつた。此傳説は第十三世紀に起つたので蒙古部落の内に基督教を奉ずるものがあつたのを大カン自ら基督教を奉じて居るやうに傳へたこともあり、此等が訛傳されたのでもあらうか始めは中央アジアにその國が在るといはれたが後にはプレスナルジョンの國はアフリカのエチオピア(Ethiopia)であるといふ事になつた。千三百七十五年イスパニヤのマヨルカ(Majorca)で製した世界圖(Mapa Mundi)にもそう載せてある。トルコ人の勢力盛なるに及んで此のプレスナルジョンと連絡を通じ東西相應じて基督教の敵を亡ぼさうといふ者が歐洲人の間に行はれ東方貿易の新路を索むるの必要と共に新地發見を促す大

原因となつた。

是より先き歐洲に於ては文明史上に大影響を及ぼすに至つた三大發明があつた。その一は磁石を航海に應用することであつて、その爲めに航海術に新紀元を開き、これまで星を目標とし海岸に沿うて覺束なく航海して居た境遇を脱し、大洋を渡り、未見の地に到るの壯舉に出ることを得るに至つた。

歐洲諸國中率先して新地發見に従事したのはポルトガル(Portugal)であつて國王ジョン一世(John I)の第五子、ヘンリー親王(Prince Henry)はポルトガルの西南角サン・ビセンテ(Cape São Vicente)に天文臺を設け航海學校を開き私財を擲つて大に航海を奨勵した。探検船は先づアフリカの西岸を南下し沿岸の諸島に航海したが千四百十六年にはカナリヤ諸島に至り千四百三十一年にはアンソレス諸島(Azores Islands)を發見したがボジヤードール岬(Cape Bojador)を越めるとは出來ないと信じて居た。此岬は海岸から四十海哩許突出し、岬の鼻から又六リーグ(一海リーグは凡五十丁)の間は岩礁があつて海は之に衝つて常に激して居るその上此附近は陸地から微細な砂礫を吹き來り、温潮と冷潮と合する爲めに水氣を生じ、四邊常に濤々として前途を認むることが出來ないので航海術に幼稚な當時の人が之を越え得なかつたのは無理ならぬこととて

ある、然るに千四百三十四年にヘンリー親王の侍臣の一人でシルカンネス(Gil Carnes)といふ人が事情あつて失うた君寵を回復せん爲め死を決して此岬を廻つて南下したのでアフリカ沿岸航海が非常に進捗し千四百四十一年にはブラマンコ岬(Cape Branc)に至り、千四百四十五年にはセネガル河(Senegal)の口を過ぎてベルデ岬(Cape Verde)に達した、此所には草木が茂生して居たので名も縁の岬と附け古來熱帯地方では草木は枯れ動物も生存することが出来ないと云ひ來つたのは全く誤であることを見した、それから探検の航海は急に歩を進め千四百六十年にはケープベルデ諸島(Cape Verde Isds.)を發見し千四百七十一年には黄金海岸(Gold Coast)に至り千四百八十五年にはコンゴ(Congo)まで進んだ、此間に貿易も追々開けアルグイン灣(Arguin)は一年二百五十デカットで獨占權を某葡人に與へギネヤ地方(Guinea)ではゴメズ(Fernão Gomez)といふ人が千四百六十九年に五百デカットを納めて獨占權を得之に對して年々百リグ宛南下するといふ條件を約した、これが爲めに亦探検が大に進み終にコンゴまで行つたのである、千四百八十六年には又ヂャス(Bartolomeu Dias)先人のまだ行つたことのない南方に進み、ヘルナナ灣(Helana Bay)から大海中を東南に十三日間航海した後更に北航してアフリカの東岸に出て進んでアルゴア灣(Algoa Bay)に至り、

尙ほ二十五哩許東北に進んだ後に船員等の懇願により止むなく歸船の途に就いた、此時アフリカ南端に突出せる巨巖を認め、海波荒さを見て荒れの岬(Cabo Tormentoso)と名附けた、ヂャスは千四百八十七年十二月リスボンに歸着した、此航海には實に十六ヶ月十七日を費し新に發見した地方の海岸線は三百五十リグの長さに達したといふことである、國王はヂャスの報告を聞きインドに至る航路全く發見さるゝも近いと思つて此岬を希望峰(Cape of Good Hope; Cabo da Boa Esperanza)と命名した。

ヘンリー親王は是より先き千四百六十年十一月十三日に六十七歳で卒したが、その事業は右の如く着々進み引いて世界の文明に資する所が多かつたことは世人の等しく認むる所で、その居城であつたサンビセンテ岬サグレス(S. Agos)崖上の城の正門上には今日も大理石の記念碑が建て、あつて、之に永久尊崇(Aeternum honorum)の文字が刻してある、親王は軀幹偉大にして眼光鋭く人を射るの赴があつたが、その顔は柔和で、衣服は質素を旨とし、酒色を節し能く情を抑制することが出来た、而して一度思ひ立つたことは百難を排して成さざれば止まない決意の強固な人であつたといふことである、その能く多くの冒險家を指揮して終に人の想像し得なかつた大功を成したのも、此の如き性質を備へて居たからであらう。

喜望峰の廻航は右に述べたやうにポルトガル人によつて成し遂げられたが偉業であつたが茲に又一層世人の注意を惹いた事件が起つた。即ちコロンブスの新大陸發見である。

コロンブス(Christoforo Colombo; Christopher Columbus)はイタリアのゼノアの人で其家は羊毛を織ることを業とし彼自身は十四歳頃から航海に身を委ね發見の大業が成つて後始めて世に知られ其末年は又誠に悲惨であつたから其生年月さへ不明で或は千四百三十六年或は全四十六年又は全五十六年であるといひ其出生の地であると主張する處もイタリア國內に十ヶ所もある然しゼノアであることはその遺言書によつて明であるし生れたのは多分千四百四十六年であらうといふことである。

歐洲の西方太平洋中に陸地のあることはコロンブスの創見ではない當時の航海者中遠方に島嶼を見たといふもの尠からず第十五世の前半の地圖にもアンティレス諸島の西方にアンチリヤ(Antilia)といふ島が載せてあるフロレンス(Florence)の醫師パオロ・トスカネリ(Paolo Toscanelli; 1397-1482)は又地理學に精通した人であつたが千四百七十四年六月二十五日リスボンに住んで居たその友マルチンズ(Ferdinand Martinz)に書を送り西方に航海してカタイに至りザイトンの港に於て香料を購ふことを得べ

き山を説きポルトガル國王に送る航海圖を一所に添へて遣つたことがある。

コロンブスは多年航海に従事した後リスボンにてフェリパムニス・ペレストレリョ(Felipa Muniz Perestrelo)と結婚しポルトサント島(Porto Santo)に引き込んで彼女の父の遺した書類を研究し又航海者の談話を聞きトスカネリの説を考へ又彫刻した木片や異様な人體がアフリカ沿岸及び諸島に漂着することのあるといふことを傳聞してアジヤ大陸は大洋の彼岸にあり西航して此所に至ることはアフリカを廻るよりも容易であらうと結論し千四百八十三年にポルトガル國王に西航船派遣を建議した。國王は之を學者に諮問したが皆コロンブスの説はマルコ・ポロの話に基ける夢であつて取るに足らぬといふ報告をしたので國王はコロンブスの建議を採用しなかつた。

コロンブスは是に於てポルトガルを去つてイスパニヤに至り暫く滞在した後有力な保護者を得て千四百八十六年一月女王イサベラ(Isabella)に謁し其説を述べたがサエマンカ(Salamanca)大學の審査委員がコロンブスの意見を容るゝ者と之を否認するものとの別れ當時國王以下回教徒の往代で忙しかつたので其意見は到底採用さるゝ見込がなかつた。コロンブスは乃ちワラスに行つて國王に説かうと思つて南方の

港パロス(Palos)へ向けて出發したが途中ラジビダ(La Rabida)のサンフランシスコ派の僧院に一泊し、その意見を述べた處が院主マルチヤ(Juan Perez de Marchena)は大に之に賛成し、女王の懺悔師であつたので直に書を送つてその賛成を促した。女王は院主の勧めを容れ、千四百九十二年一月グラナダ(Granada)の城が陥落し、多年イスパニヤを占領して居たアフリカ人が驅逐された後、コロンブスを引見して其説を聞き、彼の要求する條件過大なるが爲めに一時其請を退けんとせしが、終に談判不調なりと考へフランスへ向け出發せるコロンブスを呼び戻し、私財を投じて西航の素志を遂げしむることゝした。

コロンブスは女王から五千三百デカットを受取つて直にパロス(Palos)の港に行き、同所の富豪ピンソン家(Pinson)の助力を得て船三隻を艦装し、乗組員はパロス、モゲール(Moguer)、サニャ、(Huelva)諸港で募集し、自分は最も大きなサンタマリア號(Santa Maria)に坐乗し、ピンタ(Pinta)とニニヤ(Niña)の二隻はピンソン兄弟の指揮に任せ、千四百九十二年八月三日パロス港を出帆した。四日後ピンタ號の舵に故障が出来たのでカナリヤ島に寄航して修繕をなし、四週日の後九月六日同所を發して西航した。コロンブスは航海里數が大きいと本國を去ることの遠いのを認め、船員が不安の念を起すて

あらうと懸念して一般に見せる記録には實數より少く記入する様にしたが、航海の日數が重なり、風は常に東から吹き、地圖にあるアンチリヤの島は見えず、次第に海上の様子が遠つて來たので、船員は漸く恐をなし、本國に歸航するとが彌々困難になるであらうと考へ、十月の始めからコロンブスに歸帆を請求し中にはコロンブスの爲めに欺むかれたといひ、暴行に及ばうとするものもあつた。コロンブスは百方之を慰諭して航海を繼續したが、十月十一日になつて海上に青い枝や赤い實のなつた枝の浮んで居るのを見、又火で焼いて作つた杖を拾ひ上げたので、皆大に勇み、十二日の午前二時にピンタ號の橋頭から陸地見ゆとの合圖をなし、天明に及んで一の島に着いた。土人は之をグワナハニ(Guanahani)と稱した。バハマ諸島の一で今ワットリングス島(Watlings Isd)といふものであらうといふことである。コロンブスは盛裝し、部下を率ゐて上陸し、イスパニヤ王の名によつて之を占領し、サンサルバドル(San Salvador 聖救世主)と命名した。船員等は皆コロンブスの足下に伏し、途中反抗せる罪の赦を願ひ、コロンブスを神の様に尊んだといふことである。

コロンブスは此島から西南に航海し、數島に寄航した後、十月二十八日にクバ(Cuba)に着し、之をフナ(Juana)と名づけた。土人の言によれば、この島は頗る大きいので、コ

ンブスは彌々アジヤに着きザイトンを去ること遠からぬ所に居ると考へロドリゴ・デ・レネス (Rodrigo de Jerez) 等數人を使者としイスパニヤ王の書簡を携へて國王の處へ行かせた。一行は四日て歸り來り十二哩許距つた處に人家五十戸人口一千程の村があつて一行を非常に優待せられたが支那國內に在るとは思はれないといふ報告をした。此旅中にイスパニヤ人は始めて煙草を喫むことを覺えタバコといふ名も土人から學んだ十一月十二日同所を發し海岸に沿うて東航し十二月五日島の東端マイシ岬 (Mayst) に着し進んでハイチ島 (Hayti) に渡りその風景がイスパニヤに似て居るので小イスパニヤ (Española) と名つけた。此島には良港多く地味豊沃にして耕作に適し牧畜の便宜もあるといふので此所にナビゲードといふ城寨を築き殖民を遣すことにしたコロンブスの乗船サンタマリア號は是より先き沿岸航海中に暗礁に乗り上げて難船したので船員に餘りを生し又此地の土人が喜んで黄金とイスパニヤ人持參の品を交換したので此所に留つて富を得たいと考へたものも多く終に三十九人の希望者を得た之を第一回移民としてコロンブスは千四百九十三年一月四日歸航の途に就いたが二月十二日自から暴風が起り二船は別れコロンブスの乗つて居たニニヤ號は同十七日アゾール諸島中のサンタマリア島に着き應急の修繕を施した後四月二十四日に出帆し三月四日リスボンに着いた此所からイスパニヤ王に新發見の報告書を送り又ポルトガル國王に謁見し同月十五日にバロスの港に着いた實に同港出帆以來二百二十五日目であつたビンソンの乗船ビクタ號はイスパニヤの西北海岸に着き同所から國王に報告書を出した後これも同日にバロス港に歸り着いた。

コロンブスはバロスからセビリヤ (Seville) へ行つた當時バルセロナ (Barcelona) 駐輦中であつた國王と王妃とはコロンブス歸着の急報に接して彼を同所へ招いた。彼は途中到る處で盛大な歓迎を受けて四月中旬にバルセロナに着き國王と王妃とに謁見し發見の報告をなし携へ歸つた彼地の産物を献し同伴した土人を天覽に供した國王は謁見の時にも異例の待遇をなし又豫約の如くコロンブスを貴族に列し新發見地の總督 (Viceroy) としアドミラル (Admiral) の稱號を許し新發見地の國庫收入十分の一を與ふることとしたアドミラルの紋章は五個の碇を畫きその周圍にコロンブスはカスチリヤとレオンとに新世界を與へたり (A Castillay á León Nuevo Mundo dió Colón) と記したものであつた。

ポルトガル政府はアフリカ沿岸の探險が大に歩を進めた後千四百八十一年七月二

十一日法王シキスマス四世からアフリカに於て発見すべき地を悉く領するの許可を得た。そこでイスパニヤ政府も同様の特許を得て置く必要を認め、コロンブスの歸着後直にローマの法王廳と交渉し、其結果として千四百九十三年五月三日四日兩日附の法王アレキサンデル六世(Alexander VI)の令によつてアンレーズ諸島(Azores Isles)の西方一百リグ(100leagues約三百哩)の所に一線を畫して世界を二分し、此線の東方に當つて発見する地は皆ポルトガルの領有に歸し、又其西方の新発見地は悉くイスパニヤの占領に任することとなつた。然るにポルトガル政府は此令に服せず、終に西葡兩國から委員を出してイスパニヤのトルデシリヤス(Tordesillas)に會せしめ、商議したる上、千四百九十四年六月七日の協約を定め、ケープベルデ島の西方三百七十リグの所に分界線を置き、其正確なる地點は、兩國から委員各四名を現場に派出して定むることとした。始めアンレーズの西方百リグの所を分界線と定めたのは、全くコロンブスが同所に於て天體の狀空氣の溫度等全く一變し、又それまで東北に傾きたる磁針が忽ち西北に傾くことを實驗したのに基いたのであつた。右の協約が未だ確定せぬ前に、コロンブスは千四百九十三年九月二十五日にカデス(Cadix)を發して第二回航海の途に上つた。此度は十二隻の船に武士千二百人を分載

し、尙ほ三隻の運送船を伴ひ、新発見地に移植すべき畜類米穀等をも携へた。此行貴族の同行したのも、妙からず基督教の布教使としては、モンセルラト(Monserrat)のベネチクト派(Benedictine)の僧侶で、諸王の代官に任ぜられたものも隨行した。艦隊は十月二日カナリヤ諸島(Canary Isles)に寄の航し、十一月二十七日小イスパニヤの殖民地ナビダドに到着した。コロンブス等は曩に此地に遣した移民等が歎んで迎へるであらうと期して居たが、一人の海岸に来るものもなかつた。土人に聞いて病氣又は戰爭の爲め皆死んだことが判り、上陸して城砦の在つた所は全く空地となつたことを見出した。イスパニヤ移民の壓殺に付ては他の部落のみでなく、ナビダド城所在地の會長等も關係して居たやうであつたが、コロンブスは土人を順撫するの必要を認め、之を不問に付し、地をトして新にイサベラ(Isabella)城を築き、此所に一つの市街を建つる計畫を立てた。

千四百九十四年二月病者を送還し航海の顛末を報告する爲め十二隻の船を歸航せしめたる後、コロンブスは土人の教により、島の内地にシバオ(Cibao)といふ黄金を産する地のあることを知り、三月中旬同地に行き、此所に五十六人の移民を置いて歸つた。始めシバオの名を聞いて所謂ジバングであらうと思つたが、實地探險の上然ら

ざることを認めたといふことである。コロンブスはイサベラ城に其弟デエゴを代官として留め、四月二十四日ニヤ號外二隻の船を率ゐて探險の途に上り、先づリバ島に渡り同島の土人の指示に従ひジャマキカ(Jamaica)に渡りて同島の全海岸を探險し、九月二十九日にイサベラ城に歸つた。此頃イスパニヤからその弟バルトロメー(Bartolome)が渡來したので之に留守を托し、千四百九十六年三月コロンブスはイスパニヤへ歸航した。そのカデスへ到着したのは同年六月十一日であつた。

コロンブスは前回と同じく盛なる行列を整へて國王の許に至り、謁見して恩命を蒙つたが、當時イスパニヤはフランスと戦争中であつたので、船の艤装も新移民の募集でなかつた。其上新發見地からコロンブスの處置に不服なものが大分同船して歸つて來てイスパニヤの有力者間にコロンブス反對の聲を大きくしたので、コロンブスの意見も通らぬことが多く、千四百九十八年五月三十日に至つて漸く六隻の船を率ゐてサンルカル港(San Lúcar)を出帆することが出來た。右に述べたる如く移民募集の困難甚だしかりしが爲めコロンブスは犯罪によりて追放の刑に處せらるべきものを以て之に充つるとを企て、裁判所に右の如き罪人を新發見地に追放することを請求したといふことであるが、此は甚だ危険な殖民政策で、後自ら其弊害を受くるに至つた。

コロンブスはサンルカルからマデーラ(Madeira)を経てカナリヤ諸島に到り、同所から三隻の船を小イスパニヤへ直航せしめ、自分は餘の三隻を引率してケープ・ベルデ諸島まで南航し、それから西航して、八月初南アメリカのオリノコ(Orinoco)河口に出で、同所から北航して小イスパニヤに行つた。

小イスパニヤに於てはバルトロメーが新にサンドミンゴ(San Domingo)の市街を建設して殖民地政府の都とし、土人酋長のイスパニヤに歸服したるも、其數を増し、基督教宣布の業もフライモンパネ(Fray Ramon Pane)フライフンボルニオン(Fray Juan Borgon)等の盡力で大に進歩して居た。然し又これと同時にコロンブスの歸國の際發芽を認め、た移民間の不幸も一層大きくなつた。居た、原來移民の内にも新發見地に渡航すれば容易に金銀を得て富者となること、思つて居たものが多かつたが、實地に臨んで見れば全く豫想に反し、日々の衣食さへ不自由であるといふ有様であつた。それにコロンブス始め上に立つものはイタリヤ人であるので、總不平の聲をたかめ、終に上級裁判官フランシスコ・コルダンを首領として、叛旗を擧ぐるに至つた。コロンブスは小イスパニヤに到着して後、不平者を減するの一策として、歸航船により希



望者の退去を許し、又ロルダン以下の罪を許し降服を勧めたが之に應ぜず、本國にコロンブスの失政を報じた本國に於ても前に述べたる如くコロンブス反對者が多かつたので、政府はフランシスコ・ポバデリヤ(Francisco Bobadilla)を特派して双方の理非曲直を正し、不正者を處分することを命じた。ポバデリヤは千五百年の夏イスパニヤを發し、八月二十三日サンドミンゴに到着し翌日寺院に於て全權委任狀を讀み聞かせ直にコロンブスと其弟二人とを捕縛し之を本國に送還し其財産は沒收し叛徒には自由を與へた。

コロンブスは千五百年十一月末カヂスに着いたがカヂス、セビリヤの人々は新世界發見の大功ある人に此不名譽なる待遇をなしたことを傳へ聞いて大に激昂した。當時グラナダに駐紮して居た國王もコロンブスの書狀に接して拘禁の不當なことを認め直に縛を解かしめ二千ドカドの金を贈り其位置に相當した旅装をしてグラナダに来ることを命じた。コロンブスは十二月十七日國王王妃に謁見し沒收された財産を還付し従前の如く新發見地に於て收入を與ふる命を傳へられた。ポバデリヤは其處分を誤つたので召還せらるゝこととなり、千五百年二月十三日ドン・ニコラス・デオバンド(Don Nicolas de Ovando)後任として三十隻の船を率ゐてサン・ルカル港を出

帆し四月十五日新イスパニヤに着いた。此時伴つた移民は二千五百人であつて、又後地に於て土人を強迫して勞役に就かしむる弊を矯正せうといふのでイスパニヤ及びアフリカの兩岸から黒奴を連れて行つた。是れが米國に黒奴を輸入した始めて後日奴隷賣買の起因をなし、その爲めに戦争が起り又三百年の後にはハイチは黒人の手に歸するに至つた。

コロンブスは自由を與へられたが、政權の回復は容易でないのを見、更に新地を發見せうと企てた。是より先き千四百九十九年にバスコ・ダガマがインドからリスボンに歸航したのは既にアジヤ大陸に到着したと信じて居た。コロンブスに大刺撃を與へたのであつた。コロンブスはイスパニヤ王の補助を得て四隻の小船を艦裝し百五十人の船員を乗り組ましめ千五百二年九月九日カヂス港を出帆し六月二十九日サンドミンゴに着いたが上陸を拒絶せられたので同島の海岸に於て暴風を避け七月十四日に至つて西航の途に上つた。コロンブスが新イスパニヤに着いた時に二十四隻の艦隊が歸航の準備をして居たが、コロンブスの警告を聽き入れずして出帆したので、途中に於て暴風に遭遇し二十隻は沈没し他も尠からぬ害を被り航海を繼續し得たのは僅に一隻に過ぎなかつた。ポバデリヤもロルダンも此時船と共に海底に沈ん

だが残存の一隻にはコロンプスに還付すべき先きに没収した財産が積んであつたといふことである。

コロンプスは新イスパニヤを出帆してクバジャマイカを右に見て西に直航し七月三十日に中央アメリカのホンドラス灣(Honduras)に着いた此所で獨木船に乗つて来たユカタン(Yucatan)の商人に遭つて尙ほ北方に陸地のあることを知つた、それから海岸に沿うて先づ東に次に南に航し十一月二日にプエルトベリヨ(Puerto Belio)に到着した其所から引き返して千五百三年二月初ベラダグワ(Veraagua)に到り上陸して其地に黄金が澤山あることを發見し移民を遣さうとしたが土人の反抗を受け動かさざる損害を被り剩へ船一隻を焚かれ辛うして同所を遁れ六月末ジャマイカ島に歸着した此航海の途中船は暴風の爲めに大破し、サンタグロリヤ(Santa Gloria)着港後最早航海に堪へない状態に陥つて居た、そこでコロンプスは進退共に谷まづたが船員の一人デエゴメンデス(Diego Mendez)大膽にも土人の獨木船に乗つて大海を渡りサンディンゴに至り政府に救助を請ふた此間コロンプスは部下の叛徒と戦ひ又土人の襲撃に當り糧食の罄乏をなす等、非常の困難に遭遇した新イスパニヤよりも視察の船を出したが容易に救助に着手しなかつた、メンデスはコロンプスの資金で一隻の船

を購ひ千五百四年六月下旬ジャマイカに歸りコロンプス等を載せてサンディンゴに至り此所で航海の準備を整へた後九月中旬本國に向つて出帆し十一月初カヂスに到着した。

コロンプスの歸着後間もなく王妃イサベラは崩じた千五百四年十一月二十六日、コロンプスは最も有力な保護者を失ひ豫て政府より給與する筈であつた新發見地の収入も法廷の判決を待つて渡すこととなりその判決は只々遷延する計であつた、コロンプスはこの爲めに非常な窮境に陥り終に千五百六年五月二十一日パリヤドリド(Valladolid)のサンフランシスコ派の僧院で憐れな状態で死んだ其遺骸は同院に葬られ後セビリヤのサンタマリア寺(Santa Maria de las Chuevas)に移され第十六世紀の中頃又サンドミンゴに移葬せられハイチ島が佛領に歸した後千七百九十六年クバ島のハバナ(Havana)の大寺院に遺骨を納め晩近クバ島が獨立して北米合衆國の保護を受けるやうになつてから再びセビリヤに送還しその大寺院に納骨した。

コロンプスが死んだ家は今日も尙ほパリヤドリド市に存し、正面の壁には白い大理石の板にコロンプス此所に死せり(Aqui murió Colon)と刻んだのが懸けてある其家は大破し之を見てもコロンプス末年の悲惨であつたことが思ひ遣らるゝが、それに付

てはイスパニヤ政府の酷薄であつたのは明白であるけれども、コロンブスが航海の學者探検者を以て自ら満足せず最初から新発見地の總督となり其収入の幾分を獲得することを條件とし、又永世の貴族に列し名譽の稱號を得るが如き俗望を懷いたのが其破滅の基となつたので彼自らも大に咎むべき所がある。コロンブスの兄弟であつたバルトロメーとデエゴとは其後相續いてハイチ島で死んだ。コロンブスの子デエゴは父のアドミラルの稱號を継ぎ千五百二十六年に死し其子ドンルイスはコロンブスが主張した權利を悉く放棄し其代償として年金を受けて居たが千五百七十二年に死し其甥ドンデエゴ第二其跡を繼いだ。千五百七十六年に死しコロンブスの直系男統は斷絶したといふことである。コロンブスの庶子フェルナンド (Fernand) は僧となつてセビリヤに定住し父の傳記を作り又多く書を集め後之を大寺院に寄付した。今コロンブス圖書館 (Biblioteca Colombina) と稱へ三萬餘卷の書を藏しアメリカ発見に關する書多く、コロンブス手寫の書もあるといふことである。コロンブスが大西洋を横斷して對岸の新地を發見するに及んでポルトガル政府は新路によつてアジヤに至る目的を先づイスパニヤ人に達せられ、是れ迄專有し來つた發見の功名をも彼等に奪はれんことを恐れて速に探検事業を進めんと計つた。バスコ・ダ・ガマは

千五百九十七年三月二十五日三隻の船を率ゐてリスボンを出帆した。航海中屢々暴風に遭ひ又船員の反抗したことも度々であつたが、終に喜望峰を廻りアフリカ東岸のモザンビーク (Mozambique) モンバサ (Mombasa) 等を経てメリンダ (Melinda) に至り、それからアフリカの海岸を離れ千四百九十八年五月二十日にインドのカリクット (Calicut) に到着した。ガマは此地のサモリン (Samorin) に會見を求め條約を定めて此所に商館を置くことにしたが、此地に滞在して居たアラビヤ、エジプト等の商人等は若しポルトガル人が此地に通商するに至らば自己の利益を害するに至らんことを恐れ大舉して陸上のポルトガル人を襲ふた。ダ・ガマも一時其手中に陥つたが辛うじて逃れることが出来た。それから去つて北方のカナノール (Cananor) に行き千四百九十八年十二月十日終にインドの地を離れてアフリカに渡り前路を取つて翌年九月十八日リスボンに歸着した。此航海によつてポルトガル政府が多年目的としたインド航路を發見したので國王はダ・ガマを貴族に列しアドミラルの稱號を授け二萬クルサド (Cruzado) の一時賜金と年々二百クルサドを投じて香料を仕入るゝ權利とを與へた。ガマの部下にも亦それゝ賞を行ふた。

バスコ・ダ・ガマの歸國後ポルトガル政府はカンラル (Pedralvarez Cabral) に命じ大船十

隻小船三隻から成立し、乗員千二百人の艦隊を率ゐてインドに向はせた。カブラルは千五百年三月九日にリスボンを發し途は計らずブラジル(Brazil)の海岸に着し九月初カリクットに到着した。途中から引歸した船や難波した船があつたので此所まで來たのは僅に六隻であつた然しながらダガマの艦隊に比しては船數も倍であつたので國王も始めは鄭重な待遇をなし通商を許したが、カブラルが入港のアラビヤ船を一隻捕獲した爲めアラビヤの商人等は土人を煽動してポルトガル人に反抗させ其の爲めにカブラルは同所を去ることを餘義なくせられコチン(Cochin)クランガン(Tranganor)等を巡り又カナノールに寄港し充分の積荷をして千五百一年一月中旬に出帆し同年の九月にリスボンに歸り着いた。千五百二年三月にはバヌコメガマが十五隻の艦隊を率ゐて再びインドに向ひカナノール、ゴチンの兩所に於て通商條約の細條を定めカリクットを二回攻撃した後、歸航の途に就き千五百三年九月、澳ポに着いた。

此頃に至つてポルトガルのインド貿易は確立し艦隊は年々渡航して香料等を輸入したが、是れまでインド地方の産物はペルシヤ灣頭のオムズを經アルメキヤ又はシリヤから海によつて歐洲に入るか或はアデン(Aden)スエズ(Suez)を經て陸路アレキサンドリヤに出で必ずエジプトのソルタン(Sultan)の領内を通過した。そこで其收益も従つて多かつたからポルトガル人がインドに直航するのはソルタンに取つては面白くない。之を妨害しなければ是れまで獨占の姿であつた利益を失ふ恐があつた。それでソルタンはポルトガル人に對して敵對の態度を取つた。ポルトガルの方でも之に應ずる處置を取らざるを得ず、終にインドに總督を置くこととして千五百五年十月アルメイダ(Francois d'Almeida)を第一の總督とした。千五百九年アルメイダが歸國するに及んでアルブケルク(Afonso d'Albuquerque)が代つて任に就いた。右兩總督の在任中にポルトガルの艦隊はオムズを攻め紅海に侵入し終にエジプトの艦隊を撃破しソルタンをしてインド地方から手を引かしむるに至つた。それから又インドに於ては數回の攻撃の後に、ゴア(Goa)を占領し千五百十二年には、之をポルトガルに讓與せしめ此所を中心としてインドの西岸に勢力を扶植した。是より先きポルトガル人がインドに於て追々勢力を得る様になつた後、艦隊を派遣して更に東方に向はせた。千五百九年にはセケイラ(Diego Lopez de Sequeira)はスマトラ(Sumatra)を經てマラッカ(Malacca)に行つたが土人に襲撃されて同所を去りインドに引返した。當時マラッカは實に南洋の咽喉であつて南洋諸島に産する香料は皆此地を經由してイン

ド地方に向ふ有様であつたから此市に貿易殖民地を置くことはポルトガルの貿易政策から甚だ主要であつた、それでアルブケルケは千五百十一年の春戦艦十九隻を率ゐてコチンを發し七月一日マラッカに着いて國王と通商條約を定めんとしたが國王がポルトガル人の勢力漸く盛になり終に其國を危うするに至らんことを恐れて密に兵備を整へ不意に起つてポルトガル人を殲滅せうと謀つたのを探知しアルブケルケ先づ戦を開き八月初旬大勝を得て市を攻取した、此戦争にマラッカ王は兵三萬砲八千象數十頭を用ひポルトガルの軍は白人八百人インド人六百人から成立つたといふことである。

アルブケルケはマラッカの守備の爲めにフアモイサ (Famosa) といふ城を建て又教會堂を築き、港務長官は土人を任じ金銀の貨幣を鑄造して商業の便利を謀つたのでマラッカの貿易は直に舊態に復した。

マラッカを占領した後アルブケルケは暹羅ペグー (Pegu) シヤン (Java) スマトラ (Sumatra) と隣交を結び又アンレウ (Antonio d'Abreu) をして三隻の船を率ゐてモロッカ (Molucca) 諸島を探検させた、アンレウは千五百十一年末マラッカを發しシヤン、アンボイナ (Amboina) バンダ (Banda) 諸島を巡航して歸つた、部下の一船を指揮したセルラン (Francisco

Seilan) は其船沈没し後に代船とした支那形船も歸航の際珊瑚島に乗り揚げたので其處に來た海賊船を強迫してアンボイナに渡りテルナテ (Ternate) の王がポルトガル人の通商を望むことを聞いて該島に渡つた、彼の報告がマラッカに着いたので千五百十三年の春救助船を發し同時にテルナテ、チドル (Tidor) の王と通商を約された、セルランのみは依然テルナテに留つた、千五百十八年にもポルトガル艦隊此地方に來り同二十一年にはブリト (Antonio de Brito) 數隻の船を率ゐてテルナテに渡り同所にサン・ジョアン・パウチスタ (San Joao Bautista) 城を築き此所に滞在して貿易の擴張を計り、又艦隊の一部を派してボルネオ (Borneo) セレベス (Celebes) マリヤナ (Mariana) 諸島を探検させた、是より先きブリトの艦隊がモロッカ諸島へ航する途中イスパニヤ文の航海免狀を有つて居る土人の船に會したことがあり、千五百二十二年にはチドル島でイスパニヤの商人フワン・デ・カンボス (Juan de Cambos) を捕へ、始めてイスパニヤ人が此地方に來たことを知つた、カンボスはマゼランの世界周航艦隊の一員でイスパニヤの貿易事務官としてチドル島に滞在して居たのであつた。

コロンブスが新地を發見した後のイスパニヤから此方面に航海して探検に従事したものが澤山あつた、フロレンスの人アメリゴ・ヴェスプッチ (Amerigo Vespucci) の如きは

其一人て千四百九十九年以來五回の航海をした其間に南米ベネズエラ(Venezuela)の海岸に至り地形がイタリアのベニスに似て居るので小ベニス即ちベネズエラと稱へたベスプッチは中頃ポルトガル政府に仕へて居たが千五百五年からイスパニヤに來往し公民権を授けられ航海士長の任に就き千五百十二年二月に死んだまで其職に在つたベスプッチは屢々其航海中の見聞を公にしたが千五百七年には初四回の航海記を合本として出版し新發見地の事情を世に紹介したを以て世人はコロンブスよりも寧ろベスプッチを新大陸の發見者と思ふに至り千五百七年にドイツのフライブルグ(Freiburg)の人マルチン・ワルツェミューレル(Martin Waldemüller)は其著地理學初歩(Cosmographiae introitus)に新大陸をアメリカの地又はアメリカと稱せんと提議し千五百九年ストラスブルグ(Strasbourg)版のグロブス・ムンデ(Globus mundi)にも同年ビエナ版の地圖にも此名稱が現はれそれから追々他國の書にも見ゆるに至つた。

イスパニヤ政府は新イスパニヤ即ちハイチ(Haiti)島のサン・ドミンゴ(Santo Domingo)に政廳を置いて新發見地の統治に當らせ漸次附近の諸島を征服し千六百十年にはパナマ(Panama)の地峽に移民を送るに至つた當時之をダリエン(Darien)の殖民地と名づけた此地方移民の首領となつたバルボア(Vasco Núñez de Balboa)は勢力範圍

の擴張を計り土人の反抗と天然の困難とを排して西方に進み千六百十三年九月始めて太平洋の海岸に達し二十九日にバルボアはカスチリヤ王國の旗を掲げ拔劍を携へて海水の膝に達するまで洋中に進み入り大洋の北端より南端に至るまでの諸國諸島を國王の名によつて占領した是より先き同月二十五日海岸の山頂に達して始めて海を望んだ時にはバルボアの一行六十七人は一同膝をついて神を讚美し石を積んで祭壇を作つて神を祭り又附近の樹にイスパニヤ國王の名を刻したといふことである。

太平洋の發見は世界史上實に重大なものであつたこれまでコロンブス始め新路によつてアジア大陸に着いた積であつたが此時始めてアジアと思つたのは新大陸であつてアジアに至るには更に大海を越えなければならぬことが分つた。

太平洋の存在を知つた後時人は大西洋との連絡があらうそれを求めてアジアに行かうと思つた先づ此探檢に着手したのはデソリス(Juan Dias de Solis)であつた同人は千五百十五年十月イスパニヤの南にあるウエルム(Huelva)港から三隻の船を率ゐて出帆し南米に渡り海岸に沿うてラプラタ(Rio de la Plata)の河口に達したが此地上陸の際土人の爲めに殺され其艦隊の殘員は本國へ歸航したデソリスの遺志を繼ぎ

西洋の通路を發見したのはマゼランであつた。

マゼラン (Magellan; 葡名 Fernão de Magalhães) フニナン・デ・マガリヤンイス) はポルトガルの人で數回インドに航海したることあり、千五百十年のマラッカ攻撃にも參加したが、後アルブケルケと意見の衝突ありインドを去つてポルトガルに歸り、本國に於ては萬事己の思ふ様にならないので千五百十七年去つてイスパニヤに至りセビルの城代の女を娶り千五百十八年の初め、其推薦によつてバリヤドリッドに於て國王に謁見し西航してモロッカ諸島に達する計畫を陳べた、マゼランが之を思ひ立つた一つの動機は其友フランシスコ・セルランがモロッカ諸島より送つた書狀に諸島發見の効を自讃し其位置を遙に東方に在る様に記し従つて該諸島はイスパニヤの領域内に在る様に思はせたことであつた。

マゼランは千五百十八年三月末に至つて國王と次の條件を約定した。

- 一 マゼランは十年間此航路を獨占する事、但し國王が特に人を派する時は此限にあらず。
- 一 新發見の諸島の純收入の二十分一はマゼランの所得たるべき事。
- 一 六つ以上の島を發見したるときはマゼランは任意に其二を選び其收入の十

五分一を收得し得べき事。

- 一 初回の航海の純益の五分一はマゼランの所得たるべき事。

一 マゼラン及び其子等は軍司令官兼知事 (Adelante do Governador) の稱を許され、毎航海一千デユカットの資を投じて商品を仕入れ得べき事。

右の條件により國王は五隻の船内二隻は百三十噸宛、二隻は九十噸宛、一隻は六十噸の大きさのものを艦装し之に二ヶ年の食糧を備へ二百三十四人の船員を乗組ましむることとなつた、右の船員に對してはマゼランは全權を與へられ生殺共に其考に一任せられた。

イスパニヤ駐在の葡國公使は右の談判の様子を聞いて其進行を阻害せうと試み國王に説いてマゼランの意見を用ひざらしめようとし、又セビルに居たポルトガルの事務員をしてマゼランに勸めて祖國の爲めに此探検をとめさせうとしたが何れも功を奏しなかつた、そこでマゼランは艦隊をポルトガルに賣る陰謀を廻らして居るとか、艦隊の諸船は老朽で長途の航海に堪へないとか、種々流言を放つて船員を惑はし航海を不可能にせうとしたが之も亦失敗に歸し、千五百十九年九月二十日マゼランの率ゐた五隻の艦隊はサン・ルカル港を出帆して西航の途に就いた。

艦隊は先づケーブベルデ諸島に至りそれからブラジルの海岸に直航し海岸に沿うて南下し十二月中旬リオデジャネイロ灣に達し暫く滞在して灣内を探検した後更に南下し千五百二十年一月中旬ラブラタの河口に着した、此所まではデソリスが来たことは前に述べた様である、二月一日艦隊は此所を發し未知の方面に向つて進み三月末日サンフランシスコ港 (San Juan) に着いた、此港は南緯の四十九度十五分の地にあり追々寒氣も加はるので、此所に冬營せうと決した船員の内には此地方の物資少く飢餓の恐あるを以て歸航を希望するものも多かつたがマゼランは斷然其請を退けた、此港には殆んど五ヶ月間滞在したが其間に屢々此地方の土人に會し身長大にして足も随つて大きいのを見てパタゴン人と名づけた、パタゴン (Patagon) はイスパニヤ語大足の意で今日まで此地方をパタゴニヤ (Patagonia) といふは此故である。

八月下旬に至つてマゼランはサンフランシスコ港を發して南進し十月二十一日ピルヘネス岬 (Las Virgenes) に着いた、これは海峽の入口である、海峽に入つて中程に達した後マゼランは二隻の船をして先進して探検させたが内一隻は密に針路を轉じてイスパニヤへ向け航海した、是より先き一隻は難破したので残るは三隻となり更に進んで十一月二十八日海峽の西端に至り此の岬をカボデセヤド (Cabo Desgado) 望める岬

と名づけた、海峽を始めトドロスコロイスサントリス (Canal de todos los Santos) 諸聖の海峽と命名したが今は發見者の名によつて稱して居る。

海峽を出た後艦隊は海岸に沿うて北進し、フワンフルナンデス諸島の邊から北西に轉じ、千五百二十一年二月十三日グリーニッチの西百七十五度の附近に於て赤道を過ぎ、三月六日ラドロネ諸島 (Las drones) に着いた、其所から更に西航して、フリビン群島に達しセプー島 (Yelou) に寄港し、始めは島の酋長から好遇せられたが、四月二十七日糧食の徴發に應じないマクタン島 (Maotani) の土人を懲さんが爲め三艘の舟に五六十の兵員を分載して攻め込んだが、多數に抵抗せられてマゼランは毒矢に當りて死し、部下の殘員はセプー碇泊の船に歸つた、此時マゼランは年齢僅に四十一歳で空しく異郷の土と化した、其計畫は略ぼ成效し世界史上に於ける其功は永く没すべからざるものである。

マゼランの死後イスパニヤ人に對する土人の恐怖心大に減じ、これまで之を好遇して居たセプー島の酋長も詭計を以てイスパニヤ人を殺さうと思ひ、一日饗宴に名を籍りて重なる人々二十餘人を招き、不意に之を襲撃して或は殺し或は捕虜とした。艦隊は右の始末で船員の數が大に減じたので一隻の船を焼き乗組員を他の二船に



分載し南航して先づミンダナオ(Mindanao)に至り、それからカガヤン(Cagayan)パラワン(Palawan)を経てボルネオ(Borneo)に達し、其都ブルネイ(Brunei)で國王と條約を結び通商の許可を得たが、事情の疏通せざりし爲めに海上の衝突があつてイスパニヤ人は數人を捕虜とせられたまふ此島を去ることゝなつた。それから東南のモロッカ諸島に向ひ十一月八日チドールの島に着いた。此島の王は大に之を歓迎した。ポルトガル人は其敵國なるナルナートの島に商館を置いて居たからであつた。此所で香料を積み込んだ後、歸航の途に就いたがトリニダット號(Trinidad)は漏水の爲めに航海が出来ないので留まつて修繕することゝし、ビクトリヤ號(Victoria)はゼバスタチャン・デル・カン(Sebastian del Cano)の指揮の下に千五百廿一年十二月二十一日出帆し、翌年五月中旬喜望峰を廻り六月下旬ケープ・パルデ諸島に着しサンチャゴ島(Santiago)に寄港した。此日は船の日記では水曜日であつたが陸上では水曜日であつたので船員は大に怪しんだが、これが西航して世界を一週すれば一日を損することを初めて實驗したのであつた。

ビクトリヤ號はマゼランの艦隊の一船であることが知れてポルトガル領であつた。此島の政府から抑留されようであつたので急に腕を揚げ千五百二十二年九月六日

マジルカル港に着いた。此時生残つて居た船員の數は僅に十八人であつたといふことである。デル・カノはセビルを経てバリャドリッドに行き國王に航海の顛末を報じ、偉功の賞として一代年金を給せられ、又胃の飾として地球儀に汝は始めて予を廻航せり(Primus circumdedisti me)と記したものを用ふることを許された。ビクトリヤ號の積荷の賣上高は又艦隊の總費を支濟して餘あつた。當時香料の需用が多く其價も高かつたことは此一例でも判り、諸國が競うて香料産地モロッカ諸島に至らうとした理由も明白になるのである。トリニダット號は修繕を了へ千五百二十二年四月六日出帆したが逆風の爲めに針路を失ひ永く海上に彷徨した後モロッカ諸島に歸航し五十人の中から生存した十七人はテルナテ島のポルトガル人に投降し四ヶ月間此所に拘禁せられた。後インドに送られ數年の後リスボンに轉送せられ解放されたのは僅に三人であつた。マゼランの艦隊の乗員二百三十九人中恙なく歐洲に歸つたのは僅に二十一人に過ぎなかつたのである。

イスパニヤ船が西航してモロッカ諸島に到着した爲めに忽ち起つた問題は、右諸島は曩のトルデシリヤスの協約によればイスパニヤとポルトガルとの何れに屬すべきかといふことであつた。そこで千五百二十四年四月から五月に互つて兩國の委員が

國境のエルバス(Elbas)とバダホス(Badajoz)との中間地に於て會合し之を決せうとしたが各々其見を主張して譲らなかつた、イスパニヤ政府はそれにて千五百二十五年七月ロアイヤーサ(Garcia Jofe de Loaysa)に七隻の船を與へセバスチャン・デル・カノを航海長としてモロッカ諸島に遣つた、此艦隊前路を取つて西航したが、途中で暴風に遭ひ或は難破し或は半途歸航し旗艦一隻のみ千五百二十七年一月一日にチドールに着いた、ロアイヤーサもデル・カノも此航海中に死んだ、船も既にはや航海に堪えない様になつて乗組員はチドールに滞留した、千五百二十八年三月末前年メキシコから出たサーベドラ(Alvaro de Saavedra)の艦隊が來て彼等を救助したが此方面ではポルトガル人の勢力が兎角盛んでイスパニヤ人はチドールからも逐はれた、千五百二十九年四月二十二日イスパニヤ王チャールズ五世はモロッカ諸島の東方十七度の所に分界線を置くことを諾し、此讓歩に對してポルトガル政府から三十五万デウカートを拂ひ此争議を解決した。

是より先きアメリカ方面ではイスパニヤの勢力範圍が彌々擴がつた、千五百十九年にはコルテス(Hernan Cortes)メキシコに攻め入り全廿一年までに同地を征服し新イスパニヤ(Novispania)と稱しメキシコ市に政廳を置いて之を治めた、其部下のものは又中央アメリカの地を漸次に征服した、南アメリカに於てはピザルロ(Francisco Pizarro)アルマンロ(Diego de Almagro)等が千五百二十五年からペルー(Peru)を征服したのを始めとしブラジル(Brazil)を除いては全土イスパニヤ人の占領する所となつた。北アメリカでは千五百十二年ボンセ・デ・レオン(Juan Ponce de Leon)が始めてフロリダ(Florida)を発見し千五百卅八年エルナンデ・デ・ソト(Aernando de Soto)が此地の總督になつてからミシシッピ(Mississippi)の河畔を探檢したがイスパニヤの勢力は廣く及ぶに至らずフランス、オランダ、イギリスの諸國によつて此方面の開拓は出來たのである。

### 第三章 ポルトガル人の極東來航

アルブケルケは始めてゴアを攻取した時にそのインド經營に必要なる地點であることを認め、千五百十二年ゴアを敵手から奪ひ還した後部下の諸將の反對意見を排し丁度其時に受取つた國王の命令にも反して同所を東洋のポルトガル領の首府と定め、此所を本據として東洋貿易を擴張するの途を開いた。

マラッカを攻取した後アルブケルケは貿易の便宜を計る爲めに先づ貨幣の改鑄を行つた、造幣所を設け從來の錢を潰してポルトガル王ドン・マヌエル(Dom Manoel)の肖

像ある錫と鉛を混ぜた錢を鑄た、その最小なるものをデネイル (denier) といひ十デネイルの價あるものをソルド (soldo) 十ソルドの價あるものをパスナルド (pastardo) と名付けた又金銀貨を造りチレイニス (reis) に當る金貨をカトリコ (catholico) と稱へ同價の銀貨をマラケーゼ (malaguese) と稱へた此等貿易の便宜を計ると同時にアルブケルケは近隣の諸邦と交通し南洋諸島へ探検船を出したとは前に述べた通りである。暹羅へ使として行つたのはフルナンデス (Duarte Fernandes) であつたが暹羅王はポルトガルの強盛なることを聞及んで居たので大に彼を歓迎し全市を觀覽させその歸るとき使者を出しドン・マヌエル宛の書狀にルービーの指輪と金冠と金劔とを添へて持參させたアルブケルケは此使に接し再び使者を出して暹羅との貿易を希望する旨を傳へさせたジャバ王からも又使者が來て其敵であつたマラツカ王の亡ぼされた事を喜んでポルトガル人と好を通じたいといふことを申込んだアルブケルケはマラツカで捕獲した象其他の贈り物を持せて之を還へしたスマトラの南部にあるメナンカボ (Menangkabo) からも船が三隻黄金を積んで來航しインドの布類と交換を求めたマラツカの平和回復しポルトガル人が商業の便利を計ることが傳つて諸方から來港する船が多くなり同港は彌々繁昌した此等來航者の中に支那人もあつ

てポルトガル人はその性質が溫和で商業に巧なることは他東洋入種の比でないことを知り支那と通商する希望を増したといふことである。

千五百十六年八月豫て支那行を命ぜられてインドに渡來したフルナンベレス・デア・シドラーデ (Fernão Peres de Andrade) はマラツカを發して支那に向うたが逆風の爲めペーロ・コンドール (Pelo Condor) から引返し翌年六月再び出帆し媽港沖のサンチャン (Sancian, Shang-ch'uan) に至りベニヤガ港に入つたベニヤガ (Beniaga, Veniaga) はマレー語貿易市場の意で該島のタマン (Tiamo) を指すのである同所から三レグマ許の地に一の島あり此所に多數の支那艦隊が居たがフルナンベレスは艦隊指揮官の許可を得て水先を備ひ廣東港に入り通商の許を求めた入港の節祝砲を發したが國の習慣に背いて居るので謝したといふことである許可は北京政府の指圖を待つといふのでサンチャン島に退いて沙汰を待つこととした此間にジョルジ・マスカレーニヤス (Jorge Mascarenhas) は海岸に沿うて北航し泉州まで行つたフルナンベレスは滞在十四ヶ月に及んだが支那官憲の返答を得なかつたので商館をサンチャン島に設けトメーピレス (Thomé Pires) を館長として留め千五百十八年九月マラツカに歸航したピレスは千五百二十年一月海路福建に行きそれから南京を経て北京に至り翌千五百二十一

年漸く皇帝に謁見して通商の許可を求めたが是より先き千五百十九年八月にフェルナン・ペレスの兄弟なるシモン・デアンドラーデ(Simão de Andrade)四隻の艦隊を率ゐてサン・チャンに來り商館保護の爲めに城を設け又海員の犯罪者を審問して之を處罰し支那政府を無視し自ら主權者たる行動をなしたのと又ピンタン(Bintang)島の王がポルトガル人の暴行を訴へ支那皇帝の保護を乞うたのにより皇帝はポルトガル人を敵視し通商の許可を與へざるのみならずトメ・ペレスを捕へ廣東に送つて監禁させた而して又支那艦隊に命じて千五百二十一年來航のデュアルコ(Duarte Coelho)の艦隊及び千五百二十二年のコウチニョ(Martin Afonso de Mello Coutinho)の艦を攻撃せしめ大に之を敗つた然しながらポルトガル船は此後も時々サン・チャンに來り又福建寧波等にも船を出した寧波では一時盛に貿易を營んたがポルトガル人の驕慢な爲めに土地の商人等と衝突し紛擾を起したので又同所を逐はれ其後支那政府と折衝の結果千五百五十四年から媽港に據り廣東から支那貨物を仕入るゝことを許された。

ポルトガル人がまだ寧波附近に密航して居た頃ポルトガル人數名の乗組んだ一隻の船が偶然日本に到着し終に我邦と貿易を開くに至つた、キウロツバの舊記によれば右ポルトガル船が始めて日本に來たのは千五百四十二年で其顛末は左の通りである。

千五百四十二年ヂョゴ・フレイタス(Giogo de Freytas)一の船長として暹羅國のドドラ(Dodora)に在りし時其船の乗組員三名支那行のジャンク(Junk)に乗りて脱走せり三人の名をアントニオ・ダ・モタ(Antonio da Mota)フランシスコ・ゼイモト(Francisco Zaimoto)アントニオ・ペソト(Antonio Pexoto)とスヘり北緯三十餘度に在るリヤンボー(Liampx)寧波をいふに向ひて航行中船尾より強風をうけて陸地より吹き離され數日の後東方に當り凡そ三十二度の處に一島を認めたり日本と稱し諸書に見え其富を以て名あるシバンガス(Sipugas)マルコポロのジバンダ(Zipangu)なるが如し此地は又金銀及び他の富を有す。

これはアントニオ・ガルバン(Antonio Garvão)といふポルトガルの武人で永く印度地方に居りマラッカの城守となつたことのある人の遺著を新古發見録(Tratado…… de todos os descobrimentos antigos e modernos)と題して千五百六十三年にリスボンで出版したものに載せてある文で時人の記録として最も信を置くに足るものである。

千六百十二年にリスボンで出版したヂョゴ・コウト(Diogo de Couto)のデカダ・キンタ

ダ・アジヤ (Decada Quinta da Asia) の第八編第十二章に日本島發見の顛末と題する記事がある。ガルバンに據つた様な所もあるが一層詳密で他の材料を參加したのであらうと思はるゝので左に記載す。

當四十二年にポルトガルの人にてアントニオ・ダモタフランシスコ・ゼイモト及びアントニオ・ペシヨト (Antonio Peixoto) といふ三人の朋友暹羅の港にありしが航海の利大なるを以て其所有に屬するジャンクにて支那に行くことに決せり。ジャンクには皮其他の貨物を積み出帆せしが、天候良く恙なくアイナン (Ainão) 東京灣をいふの大灣を渡り、廣東にはポルトガル人の入港することを許さざりしにより、略中同所を通過し、泉州に向ひて進航せり。此航海中土人の颱風と稱する暴風に會せり。略中暴風は二十四時間の後止みしが、ジャンクは爲に大破し風波に任せて漂流するの途なきに至れり。斯くて十五日の後數箇の島の間に出でしが、その何處なるかを知らざりき。陸地よりは間もなく數隻の船來りしが、之に乗れる人は支那人よりは色白く眼は細くして髯少かりき。彼等に就いて島はニボンジ (Nipongi) と稱するを知れり。これ通常ジャパン (Japan) といふ地なり。彼土人等好くポルトガル人を遇せしにより、此地に留りジャンクを修理艤裝し、他に好貨物なきによりジャンク

の中の商品を銀と交換し、時期に及んでマラッカに歸航せり。發見の名譽は此人等に歸すべし。

歐洲人初來の事に關して我邦の記録は甚だ乏しく、當時の事情を明にすることは出來ないが、唯一つ據るべきものは鹿島の僧大龍寺文之が種子島の領主に

隅州之南有一島去州一十八里名曰種子略中先是天文年癸卯八月廿五丁酉千五百  
廿三月我西村小浦有一大船不知自何國來船客百餘人其形不類其語不通見者以爲  
 奇怪矣其內有大明儒生一人名五峰者略中時西村主宰有織部丞者略中偶遇五峰以杖書  
 沙上云船中之客不知何國人也何其形之異哉五峰即書云此西南蠻種之賈胡也略中所  
 謂賈胡到一處輒止此其種也以其所有易其所無而已非可怪者矣於是織部丞又書云  
 此去十又三里有一津々名赤尾木略中今雖繫船於此不如要津之深而且不漣之愈也告  
 之於我祖父惠時與老父時堯時堯即使扁艇數十擘之至於二十七日己亥入船於赤尾  
 木津丁期之時津有忠首座者略中寓上津口略中號曰住乘院略中偶遇五峯以文字通言語略中  
 賈胡之長有二人一曰牟良叔舍一曰喜利志多佗孟太手携一物長二三尺其爲體也中  
 通外直而以重爲質其中雖常通其底要密塞其傍有一穴通火之路也略中其爲用也入妙  
 藥於其中湊以小團鉛略中而自其一穴放火則莫不立中矣其發也如掣電之光其鳴也如

驚雷之轟聞者莫不掩其耳矣略中時堯見之爲希世之珍矣始不知其何名亦不詳其爲何用既而人名爲鐵炮者不知明人之所名乎抑不知我一島者之所名乎一日時堯重譯謂二人蠻種曰我非曰能之願學焉蠻種亦重譯答曰君若欲學之我亦罄其蘊奧以告焉略中是歲重九之節日在辛亥消取良辰試入妙藥與小團鉛於其中置一小白百步之外放之火則其殆庶幾乎略中時堯不言其價之高而難及而求蠻種之二鐵炮以爲家珍矣其妙藥之擣篩和合之法令小臣篠川小四郎學之時堯朝磨夕淬勤而不已嚮之殆庶者於是百發百中無一失者略下

右の文中の牟良叔舎はフランシスコ喜利志多佗孟太はキリストバンダモタの音譯と思はれる左すればガルパンの記録と符合する所は只フランシスコといふ名とダモタといふ姓とのみである年代も鐵砲記の方が一年遅れて居て一寸迷ふのであるが右の文には一大船といひ船客百餘人其形不類其語不通といひ多少文飾もあらうがジャンクではなくポルトガル船に多數のポルトガル人が乗つて來たやうに見える或は前年の發見の報を得て來た第二回の航海の事を書いたのであるかも知れない先づポルトガル人初來の年は千五百四十二年としてよからうと思ふ日本の記録には此前に歐人の來た様に記したのもあるが之れは全然誤とすべきであらう但

し此問題に付て大に世の惑を起したのはピントーの旅行記 Fernan Mendez Pinto, Peregrinacao)である此書は千六百三年に出版の認可を得千六百十四年にリスボンで出版したもので其中でピントーが東洋の諸處を旅行した後二人のポルトガル人と同船して支那沿岸を航海せる中暴風に遭ふて種子島に漂着した顛末を記したものである其記事は前後の關係から押すと千五百四十五年の事と思はれ前二者と比べると數年遅いのである。

ピントーが始めて日本に來たことは其旅行記の第百三十二章以下に載せてある一月十二日これは前の記事から押すと千五百四十五年のことであるピントー等八人交趾のウザンデー (Huzangnee) といふ町を出て三十二日を経てサンシヤン (Sancliao) に至り又進んでセリーグの距離にあるランバカオ (Lampacno) に行つたが同所で乗船に捨てられたので海賊サミボセカ (Samipoesca) の船二隻に分乗し支那沿岸を北航した此航海中他の海賊と衝突し一隻は撃沈せられピントー、ディオ・ゼーモト (Diogo Zai-moto) クリストバン・ボラリヨ (Christão Borahio) 三人の乗つて居た船は幸に逃れたが暴風に遇つて二十三日間海上に漂ふた後種子島 (Tanisima) に着いた旅行記に出て居る日數から推算すると種子島に着いたのは同年の四月下旬である種子島に二十三

日間滞在した後豊後から天竺人 (Chenchiesins) を招ぐ爲に使者が来たビントーが撰ばれて使者の肥前殿 (Figendono) と共に船に乗り、山川 (Hiemango) 鹿兒島 (Quangixumaa) 田浦 (Tanora) 湊 (Minato) 日向 (Fimiga) を經て臼杵 (Oguy) に到り、同所から陸路府中 (Fucheo) に行つた同所で國王に會つて厚遇せられた國王の一子がビントーの睡眠中に其銃を扱つて負傷した爲めビントーは國王の怒を受けたが、之を治療したので却て待遇が好くなつた。其後船の出帆が近いと云ふ報を得て種子島に歸り十五日の後に出帆して寧波に航海した。當時寧波にはポルトガル人が通商して居たので一行が到着して日本に漂着したと、日本に銀多く支那貨物を輸入すれば利益多きことを話した所が皆大に喜び一行の無恙なりしことを謝する爲め大寺院からサンチャゴの教堂まで大行列を催した。而して競つて船を繕装し二週日の後に九隻を日本に出した。ビントーが日本に来た顛末は大略右の様で此時に鐵砲を始めて日本に傳へたといふことは鐵砲記の傳と符合して居る。然し地名人名の判然しないのや事實の疑はしいのが尠くない。殊にこの次にビントーが日本に来た時には、後にゴア (Goa) に行き基督教を奉じてパウロ (Paulo) といふ教名を貰つた人を其船に乗せて歸航し、第二百零二章、第二百零三章、第三回には豊後に來てザビエルを乗せてマラッカに歸つたといひ、第二百零八

章至第二百零十四章、日本發見後の著名なる事件に毎々參加して居るのは誠に不思議である。ポルトガルの都リスボンのアジュダ (Ajuda) の離宮の圖書館に藏する日本教會史 (Historia da Igreja do Japão) といふ千五百四十九年から千六百三十四年までの歴史で千五百七十五年以降日本に滞在して居た宣教師等の手に成つたものにも、歐洲人中で日本島を發見したのはポルトガル人であるといふてガルパンの書を引き、アントニオ・ダ・モタ等三人が支那沿岸航海中颱風に遭つたことを述べ次の如く記してある。

この船は薩摩の海中にある種子島といふ一の島に寄港し彼のポルトガル人等は同所に於て銃の用法を教へたるが、それより日本全國に傳搬せり、該島に於ては今日に至るまで銃の製造法を教へたるポルトガル人の名を記懸せり。

フエルナン・メンデス・ピントーは其書中に自ら此三人中の一人にして此船に乗り組みて彼所に在りしと云へども書中の他の多の事實と同じく偽なり、該書は眞實を云はんが爲めよりは寧ろ戯樂の爲めに作りたるが如し、此船の後に豊後にポルトガル船の來りしことは、我等の兄弟なるヨーホーケン・パウロ (Yō Jō ken Paulo Japão) が其物語 (monogatari) 中に記載し、又我等親しく彼より聽きたる所なり、ポルトガル

人は通譯なき爲め土地の人と意思を通ずる能はざりしが、言語を用ふる代りに權衡を用ひて賣買をなせり。

ピントーはもと商人であつたが、耶蘇會員となり師父メルヒョール・ヌーニエス (P. the Melchior Nuñez) と共にインドを發し日本へ向けて航海し、千五百五十五年八月ランバカオに着いたことは前に云つたアジュエーダ離宮の圖書館にあるアジャの耶蘇會 (Jesuitas na Asia) と題した集の内にある千五百五十五年十一月二十日付媽港發の法兄弟フエルナン・メンデス (Fruato Fernam Mendez) の書によつて明である。又同人が其後自己の希望により退會したことは同集中の諸覺書 (Diversas Lembrances) の内日本に於て退會したる法兄弟といふ項に、

始めて耶蘇會より退きたるは師父メルヒョールが印度より同伴せしポルトガル人なる法兄弟にして、其名をフエルナン・メンデスと云ひ、もと支那に於て商人なりしものなり、同人自ら同師に請ひたるにより五十四年に退會せしめたり。

とあるので明瞭である。但し千五百五十四年とあるは勿論であらう。

右に掲げたところにより、又千五百五十四年五月の師父メルヒョール・ヌーニエスの本國に發した書狀によつて、ピントーと云ふ人があつて、屢々日本に來たことのある

ことは確であるが、旅行記はその眞面目な著作であるか、或は同人又は其名を借りた他人の戯作であるかは直に定めがたいとして、書中の記事殊に日本に關するものは多く信ぜべからざることは斷言してよからうと思ふ。

歐洲人が始めて日本に來たのは千五百四十二年即ち我天文十一年頃であつたが、交通は忽ち頻繁となり三四年の後には同時に三四隻のポルトガル船が日本の港へ來る様になつた。其頃ポルトガル船の出入したのは薩摩及び豊後の港であつたことは千五百四十六年に日本に來た船長アルバルベス (Jorge Alvarez) の報告に見えて居る。此報告は千五百四十八年に作つたもので、耶蘇會宣教師の書簡集に收めてある。

予が日本に付て知る所は次の如し、予が至りし港は北緯三十二度四分三の處にて島の一角にあり、其島は日本人等の云ふ所によれば周圍二百レグワ内外にして、其西北部及び東部にある主要なる港は博多 (Facata) 阿久根 (Angune) 京泊 (Chendemarin, Chende Mariz) 秋目 (Achime) 防津 (Boo) 山川 (Jamangou) 予が寄航せし港なり、鹿島 (Changaxuma) にして東部には根占 (Nexime) 湊 (Minato) 田浦 (Tanora) ドンシヤ (Dozoxima) ノンガモ (Fungamon, Funga) ブノノ (Bunono) ナモノ (Chanon) 又セチャノー (Xechano) の諸港ありとすへり。中略日本の風土此地に於ては都 (Meaco) より予等が發見したる地に至



るまで言語は唯一つあるに過ぎず。

アルバレズガ山川に寄港して居た時に、一人の日本人が来てその船に乗つてマラツカに行くことを求めた。此人は鹿島の人である事情により人を殺して寺院に通れて居たが、尙ほ不安であつたのと、心の慰安を求めたい考があつたのとて當時同所に入港して居たポルトガル船の乗組員で其前から相識であつたバズ(Alvaro Vaz)に謀つた所が、其頃マラツカに歐洲から来た名僧が滞在中であるから之に教をうくるがよからうといふことであつたので、其紹介を貰つて他港にあつたドン・エルナンデ(Don Hernando)と云ふ武士を尋ね、其保護を以て南に渡航する筈であつた。然るに誤つてアルバレズに右紹介状を渡し其船で出發したマラツカに着いたときには尋ねて行つた名僧即ち是より先き千五百三十四年ロヨラ(Ignacio Loyola)の主唱によつて設立せられ同四十年法王の認可を得たる耶蘇會(Companhia de Jesus)の最初の會員の一人で、千五百四十二年以來印度に來りて布教に従事して居たザビエル(Francisco Xavier)は丁度南洋諸島に行つて不在であつたから日本へ向けて引き還したが、途中暴風に遭ふて支那の一港に至り同所でバズに會し遂に彼と同航してマラツカに赴いた。此度はザビエルも此地に居つたので丁度居合せたアルバレズと共に之に面會し其勸めに

任せて翌千五百五十八年ゴアに行き、三月にサン・パウロの學校に入學した。それから八月の間にポルトガル語を習得して人をして其鋭敏なのに驚かしめ又随伴した二人の僕と共に基督教を奉じ彼はパウロ・ダ・サンタ・フェ(Paulo de Santa Fe)他二人はジョアン及びアントニオといふ教名を貰つた。パウロは通常アンジロー(Angelo)と云ふ名であつたとしてあるが、前に掲げた日本教會史にはアンジローといふは誤りて俗名はヤシロー(Yajiro)といひ、世を捨て剃髮したる後はアンセイ(Aney)といふたとある。ザビエルは千五百四十九年四月中旬右三人の日本人と師父コスモ・デ・トルレス(Padre Cosmo de Torres)外一人のポルトガル人(Lay brothers)とを伴うてゴアを發し、マラツカを経て日本へ向け出帆し多くの艱難に遭遇した後に同年八月十五日鹿島に到着した。而して九月末國守に面會し宣教の許可を得て直に教化に着手した。パウロは通譯として彼を助け又宗教問答等の翻譯をした。布教は追々効を奏したが僧侶の反抗の爲め翌年の九月には薩摩を去らなければならぬこととなり平戸に移つた。同所にては一行大に歓迎せられ教徒も急に増加したが此所には師父コスモを留め、ザビエルは十月末山口に進み又京都へも上つた。當時戰亂の際で宣教の便利を得なかつたので山口に立戻り、丁度其頃ポルトガル船が豊後に入港したので終に府中に至り千五

百五十一年十一月同船は乗り込み歸航の途に就いた。  
 ザビエルの日本に滞在したのは右に述べた様に千五百四十九年の八月から千五百五十一年の十一月まで二年半に滿たない間であつたが、日本の大に教化し得べきを見て印度に歸着した後直に宣教師を派遣するとに盡力し、又ローマの耶蘇會の本部へも日本の事情を報じ宣教師派遣に付ても種々注意した。彼自身は支那の教化に志し千五百五十二年四月ゴアを發しマラッカを経てサンシヤン島に行き不幸にして病を得て翌年十二月に同所で死んだが日本の宣教は其後大に進んで全國宣教師の至らぬ所はなきに至つた。これも全くザビエルの功であつてザビエルは實に日本の基督教の開祖である。

ザビエルが歸るときに豊後からインド總督に使者を出して之を同行せしめた。此使者は千五百五十二年にザビエルが撰んで出發させた師父バルタザル・ガノ(Padore Balazar Gano) 師父ペドロ・ロメルカセン(Padre Pedro d'Alcacer)等と共に歸國し總督から領主に贈る多の品物を携へ歸つた。

ポルトガル船の入港した港は始めは薩摩の諸港であつたが、ザビエルが僧侶の反抗に遭うて平戸に移つてからは或は平戸に行き或は豊後に行つた。千五百五十六年からは年々平戸に入港したが、千五百五十八年宣教師が僧侶の反抗によつて同所を逐はれたので翌年から入港を見合せうとし、千五百六十一年同所に於てポルトガル人と平戸の人との間に衝突があつて船長以下十餘人殺されたによりその翌年からは横瀬浦に入つた。基利斯督實記と云ふ書には此の時事が大分委敷載せてある。千五百六十四年には横瀬浦は天災の爲め港が荒れたのでポルトガル船も再び平戸に入港した。此時には宣教師と平戸の領主との間に交渉があつて其纏るのを待つて漸く入港したのである。その翌年には福田に入港し、それから口の津志岐其他諸港へ入つた。千五百七十年始めて長崎港に來り、その良港であることを認め爾後年々同港に來たることとなり終にポルトガル貿易の港となつた。

ポルトガル人が日本に於て貿易の港と定めた長崎はもと深江津といふ寂しい漁村で長崎氏の所領であつたがポルトガル船が年々入港するやうになつてから大村平戸等は勿論京大阪堺等の商人が次第に此所に集り忽ち繁華の土地となつた。

當時の貿易船は皆帆船で定期の風を利用して航海したから東洋に航海するポルトガル船は毎年四月にリスボンを發し喜望峰を廻つて九月か十月かにインドのゴアに着き同年の十二月か翌年の一月に至つてゴア又はコチン(Cochin)から歸航の途

に上りリスボンに着するのは六七月頃であつた支那方面に来る船は毎年四月ゴア又はコチンを出て、六月にマカオに着し、日本に来るものは六七月にマカオを發し二十日内外で長崎に着した時には之より餘計の日を要し四十日かゝつたこともあつた。日本に来るには毎年四月頃から九月頃に亘つて吹く西南の時風を利用し日本を去るには十月頃から三月頃にかけて吹く東北風によるのであつたから長崎港に碇泊の期限は長い時には殆んど半年に及んだ、毎年來航の貿易船の數は定航の官船一隻の外ジャンク船を併せて二三隻乃至七八隻に達したやうである故に長崎の繁昌は推して知らるゝのである。

#### 第四章 日本に於ける基督教の宣教

日本に始めて基督教を傳へたのは耶蘇會の宣教師ザビエルであつたことは前に既に述べたが、此派の開祖ともいふべきはイニゴ・ロヨラ (Inigo Loyola) といふイスパニヤの武士であつて、ある戰闘に於て負傷しその治療中に種々宗教書を読んで大に感じ快癒の後宗教に身を委ねることに決した、そこで先づイスパニヤの高名なる寺院を巡りそれからローマ、ゼルサレム等を巡歴しバルセロナ (Barcelona) に逗留して二年間ラ

テン語を研究し、其後又パリの大學に入つて學問をした、此所に居ること六年千五百三十四年に至つて終にユダヤ (Judea) に基督教を傳ふることを目的とせる會を組織した、此時には會員はロヨラ共七人、ザビエルも其一人であつた、その後更に三名新に加入し千五百三十七年一同ベニスに行き法王の許可を得てユダヤに渡らうとしたが、丁度ベニスとトルコとの戰爭が始まつたので之を果し得なかつた、そこでロヨラは當初の目的を改め本會を耶蘇會 (Company of Jesus) と名け法王の兵となつて働くこととし會の設立認可を法王に求めた、これは一時頗る困難であつたに拘らずポルトガル王が特にローマ駐在の大使に命じて盡力させたので千五百四十年九月法王から認可を得、翌年四月ロヨラは會長に推された間もなく會員は法王の命を帯び又は宣教の爲め諸方に散じた、ポルトガルに於てはコインブラ (Coimbra) に耶蘇會の第一の學林を建て、次いでゴアにも學林を設けた、何れも東洋傳道の爲めに人を養成するを目的として居たので、ザビエルを日本に導いたパウロが入學したのは實に此のゴアの學林であつた。

耶蘇會の起りは大略右の通りであつたが、その組織は甚だ整頓したもので會員には六階級あり見習會員から第六級の會員となるまでには少くも三十年を経過し度々困

難なる試験を通らなければならなかつた。會員は同種類のものが同所に居住する仕組で見習寮 (Noviciate house) 學林 (College) 正會員宿舍 (professed house) 宣教師居住所 (missionary residence) 等があつた。會長はゼネラル (general) とし、世界を數區 (provincial) に分ち各區の長をプロビンシヤル (provincial) といひ、宿舍にはスノビリヨル (superior) あり學林にはレクトル (rector) あり何れも定期に其部下の動靜を上官に報ずることになつて居た。而して又上官が私曲を行ふことのない爲めにレクトルスピリヨル等から直接ネラルに報告を呈することにしてあつた。此の會は右の通であつたから監督の行届いた秘密結社の様で後に世人に恐れらるゝ様になつたのもその爲めであつた。

ザビエルが日本を去つた時に豊後の領主はポルトガル國王に宛てた書狀に鎧を贈物として添へ一人の臣下のものに持たせてインドに遣つた。その翌年インドからザビエルが送つた宣教師等と共に右の使者は歸朝した。宣教師等はインド總督が豊後の領主に贈つた武器等を呈した處が領主はその一人に總督に謝意を通じ宣教師を保護すべき旨を傳へんことを求めてインドに還らしめた。此の如く豊後の領主はポルトガルと親交を結んで大に基督教を保護したので千五百五十三年アルカセバ

(Pedro d'Alcoveva) が領主の命を受けて日本を去つた頃には豊後には宣教師伴天連バルタザル・ガゴ (P. Baltasar Gago) 外一名ありて信徒は六七百人あり山口には伴天連トルレス (P. Como de Torres) 外補助員一名ありて信徒千五百人あり平戸には信徒二百人あつたといふことである。

千五百五十二年にアルカセバ等が日本に着した後は一時宣教師の渡來するものになかつたが同五十六年に至つて伴天連メルシヨル・ヌニェス (Padre Melchior Nunez) が數名を率ゐて來着してから追々多數になり布教の區域も廣くなつた。始めて京に布教したのもヌニェスと一所に來た伴天連ガスマルビセラ (Gaspar Villla) であつた。

此頃は宣教師の來る所にはポルトガル商船が入港し之を排斥するものは外國貿易の利を收むることが出來ないといふ始末であつたが又彼等によつて西洋文明の利器を得武力に於て優勢を占めうと計り彼等を招いたものが多かつた。豊後の領主が基督教の宣教師を保護する報酬として火藥の供給を自領に限らんことを要求し領主よりニセアの司教 (Bishop of Nisea) に宛てたる千五百六十七年及び同六十七年の書狀参照信長が宣教師等に聽いて天正四年に安土に西洋式の城を築いた如きは其例である。此外に宣教の方便となつたのは宣教師等の中に醫を兼ね病院を開いたもの

があつたことである。最初の西洋醫はルイス・アルメイダ(Luis Almeida)と云つても商人であつたが千五百五十四年頃豊後に來り耶蘇會員となつて其儘同所に滞在し私財を投じて病院を建て専て治療に従事した。其後又癩病院を設け國王の補助を得るに至り諸國から治療を受けに來るものがある様になつて信徒となるものも亦増加した。尤もアルメイダは頗る魔術に通じて居たといふことであるが當時は歐洲の醫學も餘り進歩して居らず専門の醫家が來た譯でもなかつたから治術に於ても至らぬ所があり醫藥の如きもの日本人から學んだものも尠くなかつた様である。現にマツリヤ性の病氣に用ふる藥を漢書を學んだ日本人から傳へたことは宣教師の書中に見えて居る。最も當時の人を感動させたのは人の嫌惡する癩病者を救濟せうとしたことと此等病者及び其親戚の間に熱心な教徒を得たのは自然の結果である。右の有様で基督教は追々盛になり千五百七十九年に伴天連バリニヤニが視察の爲めに日本に來た時には耶蘇會員は總數五十五人内二十三人は伴天連で三十二人は異留滿即ち補助者又は學林の生徒であつた。此内に日本人は二三名に過ぎなかつた。信徒の總數は判然しないが千五百八十一年には十五万人であつたといふ人もある。バリニヤニは日本の基督教の状況を詳に視察した後日本全國を三區に分ち各區に

區長(superiors)を置き副地方長(viceprovincial)をして之を統轄させた。右三區は次のもので當時の状況は下記の通りであつた。

下

肥前及び天草

有馬にセミナリヨ(seminario)學林あり伴天連二人

異留滿三人少年生徒二十二名あり

有家に宣教師二人駐在す其家はもと佛寺なりき

口ノ津に宣教師二人駐在す

大村には伴天連一人異留滿一人ありインドより

來る宣教師の就學すべきコレジヨ(Collegio)大學林

を建設する等なり

長崎大村侯より寺領として與へられたる地にし

て伴天連二人異留滿一人駐在す

串山には伴天連一人異留滿一人あり

臼杵に訓練所(House of probation)あり伴天連三人異留

滿三人新入會員の試験中なるもの六人あり

府内にはコレジヨあり伴天連二人異留滿なる學

豊後

生八人あり

野津には教會堂あり伴天連一人日本の異留満一人駐在す

京

京に宣教師數人駐在す

安土山にセミナリヨあり少年學生十二人就學す

右は千五百七十九年末の宣教師等の報告書によつたのである。

基督教が我邦に傳へられたのは鹿島が最初であつた、それから平戸山口と順々に布教せられたがザビエル歸去の時に宣教師等を山口に留めて置いたので、最初に教會堂の建設せられたのは同所であつた、その年代は天文廿一年で大道寺といふ名であつた、次は豊後で弘治元年(千五百五十五年)前に府内に教會堂と宣教師の住所があつたことは同年の宣教師報告書に見えて居る、平戸にも弘治元年に禮拜所があつたことは他の書狀に載せてあるが天門寺といふ教會堂の建つたのは永祿七年(千五百六十四年)である、永祿十一年(千五百六十八年)伴天連オルガンチノ(烏爾干伴天連 *Organtino*)が信長に説いた結果、信長は京四條坊門に四町四方の地所を與へ教會堂を建てさせて永祿寺といふ號を許した、叡山の衆徒が延曆寺の外に年號を寺號とする

例がないといつて禁裏に強訴して之に反抗したので後に南蠻寺と改めた、此等の教會堂は佛教の寺院に類した名稱を持つて居たと同じく建築も佛寺に類した日本式であつたらうと思はれる、法王グレゴリー第十三世(Pope Gregory XIII)の記念碑に其寄進に成つた豊後安土其他の學林宣教師の住所等の西洋風建築の圖が彫刻してあるが此は寧ろ想像になつたもので實際は所謂ポルトガル人來朝圖の屏風にある様な日本風のものであつて教會堂は家根に十字架があるので佛寺と區別された位であつたらう、内部に於ても現今の天主教會堂の模様が頗る佛寺に似て居る位であるから其頃のは一層類似したものであつたらう。

ザビエルが日本に來て間もなく基督教問答と基督傳との翻譯をパウロにさせたといふことであるが千五百五十五年には基督の傳と萬物の始源を論ずるものと二つの日本語の宗教書が出来て居た、其後日本語に通じた宣教師やポルトガル語ラテン語等を學んだ日本教徒が殖えたので翻譯書を追々増加した、千五百九十年に歐洲から活字を取りよせて此等の書を版にした、何れも宣教師等の便を計つてローマ字で綴つてあつたからである、これと同時に日本語學習の便を與ふる爲めに文法書、字書等も編纂印刷された、日本語の書も次いで版になつた、今序に左に現存して居る書籍

の者と出版の地在年代とを掲げる尤もローマ字綴であるのを普通日本字に改めてある。

- 一 サンクトスの御作業の内抜書 卷第一 加津佐 一五九二(天正十九年)
  - 二 ドクトリナ (Doctrina) 天草 一五九二(文祿元年)
  - 三 フイデスの導師として伴天連フライルイス、デグラナダの編れたる書の略 天草 一五九二(文祿元年)
  - 四 コンテンブツス、ムンヂ(トマス・ア・ケンピス著イミテ)シヨ・オブ・クライストの別名 長崎 一五九六(慶長元年)
  - 五 ドリトリナ、クリスタン 長崎 一六〇〇(慶長五年)
- 又日本文字の書には次の様なものがある
- 一 どちらいなさりしたん(基督教義) 印刷地出版年月缺く
  - 二 こんふえすしよなりうむ(懺悔文) 長崎 一五九八(慶長三年)
  - 三 さやどべかどる(罪人の導師) 同 一五九九(慶長四年三月)
  - 四 ともりなかりしたん (Doctrina Christiana) 同 一六〇〇(慶長五年六月)
- 耶蘇會活版所後藤登明

文法書字書其他日本語を學ぶ爲めの書の中には、

- 一 日本のごとばとイスリリヤ(歴史を習ひ知らんと欲する人の爲めに世話に和らげたる平家の物語 (ローマ字綴) 天草 一五九三(文祿二年)
  - 二 エソポのフアブラス(伊會保物語)ラチヌを和して日本の口となすものなり(ローマ字綴) 天草 同
  - 三 マヌエル・アルバレス文法書ラテン語ポルトガル語の働詞の變格を擧げたる所に日本の働詞變格を對照して出したるものなり 天草 一五九四(文祿三年)
  - 四 ラテン、ポルトガル、日本三國語對照譯字書九〇八頁 天草 一五九五(文祿四年)
  - 五 日本語ポルトガル語對譯字書 長崎 一六〇三(慶長八年)
  - 六 伴天連ジョアン・ロドリゲス著日本文法三卷 長崎 一六〇四(慶長九年)
- 右の諸書は今日現存して居るものゝみであるがその部数は甚だ少いローマ字綴、ポルトン、オクスフォルド、ライデン、リスボン等に散在して居る、今知れて居る所では世

界中各種一部か二部位あるに過ぎない、我國では水戸の縣廳にローマ級のどくとりなくりすたんが一部あるのみである、これは多分ローマのカザチナンセ圖書館にある日本文のどちりなかりしたんと同文であらう。  
右に擧げた基督教書類の内容の一端を知る爲めに慶長五年日本文どちりなかりしたんの目錄左に掲げよう。

- 第一 さりしたんといふは何事ぞといふ事
- 第二 さりしたんのしるしとなる貴さくるす十字架の事
- 第三 ばあてるのすてる(主)の祈禱の事
- 第四 あへまりや(Ave Maria マリアに捧ぐる祈願)の事  
たつときびるせんまりや(Virgen Maria 處女マリア)のろみする rosario 數珠とて百五十篇のあらしよ(oralis 祈禱)の事  
御よろこびのくはんねん五かてうの事  
御かなしみのくはんねん五かてうの事  
ごらうりや(gloria 榮光)のくはんねん五かてうの事  
ころは(coro 半るちり)のあらしよの事

- 第五 なるべれじよな(Salve Regina マリアに捧ぐる祈願)の事
- 第六 けれど(Credo 信條)ならびにひしつす(fides 信仰)のあるちり(artigo 箇條)の事
- 第七 てうす(Deus 神)の御あまて十のまんだめんとす(mandamientos 戒)の事  
御あまてのまんだめんとす
- 第八 たつときまけれじや(Ecclesia 教會)の御あまての事
- 第九 七のもるたる(mortal 重)の料の事
- 第十 さんたえけれじや(Sancta Ecclesia 聖教會)の七のちからめんと(Sacramento 聖儀)の事
- 第十一 此外さりしたんにあたるかんようの條々  
じひのしよな  
てよろがれす(theologale 神學)のびるつうてす(Virtudes 道德)のしよ三の善あり  
かるぢなれす(Cardinales 主たる)のびるつうてすとしよ四の善あり  
すびりつちんと(Espiritu Santo 聖靈)のだうねす(dones 賜物)とて御あたらは七あり  
べなべんつらんち(bemaventurança 幸福)は八あり



どちりなの目錄は右の様なものである

基督教に關することばは始めは佛教のことばを用ひたが右の様な翻譯書が多く出来る様になつては到底在來のことばでは足りなくなつた、そこで新語を作る代りに原語を成るべく日本語に近い様に變じて用ふることにした、右の目錄を見ても原語を採用した事は直に判るが外に少し例を擧ぐればデウス神を天有主又は天主とし、インフルノ地獄をキンヘル野又はキンべる野、グレド信條をケレド、グラサ惠をガラサ、コンフィッサン、懺悔をコヒッサン、サチスファッサン、満足をサシチハサン、ロザリヨ、珠數をロザイロとしてある而して此等のことばには往々其の書の内に解釋を付けてある。

耶蘇會宣教師等は右に述べたる様にして基督教を説いたが信徒の類は追々増加し諸侯の間にも信徒が出来た中には眞に歸依したものもあつたが又貿易の利を得る爲め教を奉じ或は臣民に信教を許したのも少くなかつた、日本の宣教事業が成効するのを見て耶蘇會では彌々之に力を用ひ法王グレゴリー十三世は特に補助金を出したアレキサンデル、バリニヤスが日本に渡來して宣教の模様を視察した後千五百八十二年インドへ向けて出發する時に九州の主たる基督教を奉じた諸侯を説いてイスパニヤ王とローマ法王とに使者を出させた、これによつて遠島なる日本に基督教の傳つたことが歐洲一般に知られ殊にローマ法王廳に於ては耶蘇會の盡力を多とし日本の宣教は耶蘇會に一任することと定めた、九州諸侯遣使の事は當時全歐洲の注目を惹いた事件でもあり、日本人の歐洲を漫遊した初めてである。

## 東西交通史 終

62  
1101

2  
760  
1101  
—

969

